
（銀魂。） 隻眼の吸血鬼とある地味な少年との出会いのその後。

Natu

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（銀魂。） 隻眼の吸血鬼とある地味な少年との出会いのその後。

【Nコード】

N8922L

【作者名】

N a t u

【あらすじ】

此方は、短編の隻眼の吸血鬼とある地味な少年との出会いの続きみたいなものです。尚、此方は初BL連載と言う事なので・・・もし苦手な方はお退き頂く事をお勧め致します。と同時に銀魂第一作目等の自分のオリキャラも何人か出てくる予定でもあります。この小説では一応高山がメインとなりますが、ごく稀にですが高銀等にもなる可能性もございますその辺もご理解とご了承のほどよろしくお願い致します。設定は・・・短編のまま変わらないと思います。この注意書きを読んでからの苦情等は他連載同様にその前もですが一

切お受けいたしませんのでそちらもご理解とご了承のほど重ねてお願い致します。また、複数漫画のコラボ？と言う事もこの小説ではあり得ますのでその辺もご理解とご了承のほどを重ねて重ねて大変に申し訳ありませんが宜しくお願い致します。その為あえて（銀魂。）とさせて頂きました。

オリ要素満載？です。

大丈夫と感じた方は本編へどうぞ。

以下はあらすじみたいなものです。

とある日の東京のある街で夜にある事件に巻き込まれた特殊ダムピールである山崎退

彼はぼろぼろで瀕死と言っても良い状態に見舞われた。だが、其処に現れたのが

日本吸血鬼界の帝王である純血の高杉晋助。エンペラー彼と出会い山崎は特殊ダムピールから吸血鬼へと変貌し彼の運命も変わる事となる。と同時に其れはもう1人の特殊ダムピールの運命とそして嘗て炎龍と呼ばれ高杉の黒猫と呼ばれた女橘夏美の運命もすこしずつだが変わって行こうとした。此れは其れの序章？にすぎなかった。

・・・その仲間たちも。

注意書き。(必読)(前書き)

短編の続きみたいなものです。

注意書き等載せておきました。

ユーザーの所にも書かせて頂きましたが私の小説は手始めに必ずお手数ですが必読の方をご覧頂く様をお願いしております。オリ設定が基本的に多いものですから(苦笑；；)原作派の方にもご理解いただきたく思いまして。

その辺もご理解とご了承のほど重ねてお願い致します。

注意書き。（必読）

此方は短編の隻眼の吸血鬼とある地味な少年の出会いの続編見たいなものとなる予定です。尚、設定は短編とほぼ変わりません。ので、もしかしたら・・短編同様な分も出てくるかもしれません。その辺はその辺でご理解とご了承の程よろしくお願い致します。尚基本的にはB1で一応高山と言う設定です。

‘同性愛’が出てくる可能性もございますので（流石に裏はないと思うのであえて年齢制限は致しません

が・・一応念の為R15設定にはさせていただく予定です。此方もゆっくりと時間かけて更新していきたいと思っております。残酷シーン等ありの予定です。）

キーワードにも（10字以内の為念の為15禁等）させて頂きました。尚一応ですから。

そんなにも悪い風にはならないと思います。ですが・・くどくて大変に申し訳ないですが苦手な方は

即座にお退き頂く事をお勧め致します。苦情批評等は他連載同様一切お受けいたしませんのでご理解とご了承のほどよろしくお願い致します。

この必読を読んでいただいた後に自分は大丈夫だと思われた方はどうぞ本編の方へ。

N a t u の銀魂吸血鬼世界をお楽しみ頂ければと思います。

注意書き（必読）完。

注意書き。 (必読) (後書き)

時間がかかってもゆっくり気長に頑張って更新していきたいと思っております。

他連載同様温かな目で見守って頂ければ幸いです。

第1夜。プロローグ。（前書き）

吸血異世界設定なので…一応章ではなく‘夜’に此处では変更させて頂きたいと思います。その理由は…なんとなくです（笑；）すみません。

もしかしたら変更するかもしれませんが。ご了承のほど。尚注意書きに書きそびれましたがひょっとしたら違う漫画からのキャラもすべてではないですが出る予定です

その辺もご理解とご了承のほどよろしくお願い致します。

短編とほぼ似た様な感じです。其れではどうぞ…。

第1夜。プロローグ。

此処は、東京のとある街。

で、静かな夜だが・・・此処である事件が発生した。

そして・・・路地裏。

あたりから男共の声で「クソオオ！！あの半人前め！！何処に行きやがった！？」

「オイ！！奴はかなりの手覆いだ！！そんな遠くに行っていないはずだ！！さがせ！！」

「オウよ！！」そして男共は闇の中へと走りさって行った。

と同時に路地裏で壁側にもつれこむように倒れ込んだ1人の青年。

ダムピールの山崎退だ。

彼は、ほぼって言って良いほど瀕死の状態だった。

退ゴホゴホと咳払いをし血を吐き出し息を切らして「・・・ハハ。こつ、こいつはヤバいな。」

「お、俺・・・この場で死ぬのかな？あっけねエ」。

もう、少し生きていたかった。

そう呟き眼を閉じようとしただが・・・。

「ククク。オイオイ。『こんな所でくたばっちまうのかア』？」

と低い男の声がした。

その男は黒紫のスーツを着て黒のシャツを身にまとい靴は金色の靴を履いていた。

うすら黒がかかった紫の短髪に左目には黒の眼帯を施してある。

右目は碧色をしていた。

山崎はその声を聞きつつすらと目を開けた。

そしてうすらうすらではあるがその男を見て「・・・だ、誰？」

誰なんだ？一体この男は（ヒト）は。

するとその男は山崎の間にしゃがみ込み右目で山崎を見てニヤリと笑い行き成り「死にたくねェだろ？生きてェだろ？」

山崎はその声を聞きゆっくりながらも頷いた。

そして男はククと笑いながら山崎を抱きしめて「俺アがお前エの願いを叶えてやるよ。」退。」

山崎は一瞬驚き男に眼をやって・・・。

な、何で俺の名を知ってんだ？この男は・・・！？

何で・・・と相変わらず疑問視していた。

だが、男はそんな山崎をよそに「あア・・・まだ、自己紹介がまだだったな。俺ア高杉晋助っつもんだ。よろしくなア。」

山崎再び驚いて・・・。

な！！た、高杉って・・・。

まさかあの日本吸血鬼界の帝王の^{エンペラー}高杉晋助！？

な・・・何で？？？

だが、疑問持ち続けている山崎をさらによそにしてニヤリと笑い耳元で「俺アがお前エを、拾ってやるよ」退。「そう囁いた次の瞬間高杉は山崎の首筋に顔うずめ下で舐めた。

そして・・・。

ブツリと高杉の牙が山崎の首筋に打たれた。

ズズズ。ズズズ。と山崎の血が高杉に吸われる音がする。

山崎心の中で・・・。

あア・・・此れでもう『今の俺』とも『別れなんだな』。

特殊ダムピールは吸血鬼に咬み付かれると自身がダムピールから吸血鬼化するのを知っていた。

山崎はフツと気を失った。

と同時に高杉も牙を抜き手で口についた山崎の血を拭いクククと笑い山崎の髪を撫でて「・・・今日からお前エの『主』はこの俺だア。『一生ついてきてもらうぜエ』？退。」そう言い山崎を抱え闇へと消えて行った。

一方、その様子を1人の男が見ていた。

銀髪の男で赤い目をしていた。名は坂田銀時。

彼も山崎と同じ特殊ダムピールである。

実は、彼も高杉を始め他の純血等に狙われている。

黒のスーツと赤いシャツを着ていた。

銀時頭かきながら「・・・やれやれ。ある意味やべエ事になっちまったなア。ジミーの奴が高杉につれて行かれちまった。か。俺アも何か対策ねらねエといけねエな。」そう呟きその場を後にした。

すると入れ替わるかのように黒の短髪で全身黒ずくめの男がタバコを吸いながらニヤリと笑い「やっと見つけたぜ？」俺の銀時。」と呟いた。この男も高杉と同じく純血であり名を土方十四郎。高杉の知り合いでもある。と同時に銀時を何故か知らないが？とても気に入っていた。

噂では日本マフィアのボスとの噂も。。

土方クと笑い「今度こそ逃がしはしねエよ。絶対になア。」

一方、その裏では1人の女がひっそりとその様子を見ていた。

そして焦りながら「・・・オイオイ。何で‘兄貴’が此処にいんのさ？日本離れていたんじゃないアなかったのかよ。」と罰惡そうに小声で言った。

その女の名は橘夏美。（彼女は人間）土方の妹分であり、幼少の頃高杉に懐いてよく可愛がられた。高杉曰く‘俺の黒猫’だそうだ。何故かは知らない。（彼女の詳しい設定は基本的に銀魂連載とは変わりません。（今の所）因みに闇の始末屋炎龍の過去持ちそして、左肩と首には蝶の小さいが刺青が施されてある。

その施し主は高杉である。現在は中立派組織ワカバリリーダー兼幹部で紅のリーダー兼幹部でもある。

夏美はチラと見てその場をすばやく去った。

土方も其れに気づいたのかチラと見てククと笑い「・・・夏美か。

」

まさか、あいつも此処に来ていたとはな。

高杉の奴にでも教えてやろうか。

そして土方空を見てタバコを吸いながら「・・・今夜はデケエ月が出てるな。良い夜だ。『獲物』と序に『俺の妹分』も見つける事が出来たんだからなア。」

俺からもそして高杉^{あいつ}からも「二度と逃げ切れると思うなよ」？夏美。

そつ心の中で呟き不敵な笑みを浮かべ闇の中へと去って行った。

一方、夏美は愛車である黒のベンツ221Bを運転していた。

夏美顔を再びしかめてタバコに火を灯しながら「・・・まいったね。兄貴が居たとは。本当に、まいったよ。」

このまま私じゃアは逃げ切れるのかな？

とも呟いていた。

と同時に反対車線に1台の黒のポルシェが止まっていた。

すると運転席の窓が開き銀色の長髪で黒の帽子をかぶった男が夏美の愛車を見てニヤリと笑い

「……………まさかな。」と呟いた。

第1夜。プロローグ完。

第1夜。プロローグ。（後書き）

今章も御付き合い下さいまして有難うございます。

注意書きに書きそびれました。違う漫画キャラは某名探偵の悪役のニヒルな男です。（笑；；）其れは次章追々明らかにしていきたいと思ひます。

設定は彼も吸血鬼設定です。

其れでは次回予告風をどうぞ（笑）

夏美の愛車を見かけた銀髪の男。

すると助手席に座っていた青年がその男に「なア・・・あの帝王エンペラーの黒猫で嘗てアンタと一時つるんでいた女ってあの女？」

その男はクククと笑い「あア。多分そうだ。あいつは黒のベンツ211Bをあ頃も乗っていたからな。」と同時に「あの女の車だつてこと前から調べはついていた。あの車を見た時にはもう俺は小型カメラ付き盗聴器をしかけてあつたのさ。」

青年は「ふん。そうか。で？何？」とつ捕まえんのか？」

「当たり前だろ？俺がみすみす逃がすとも思っているのか？」と再び男はニヤリと笑い青年を見て言った。

青年はクスと笑い「いや。全然。」そう言い男は満足したかのように黒のポルシェを走らせた。

「第2夜。夏美を陰で見つめた謎の男2人組。そして・山崎吸血鬼としての目覚め。」「次章もどうぞよろしくな。」

以上です。ひょっとしたら後半にでも山崎さんが出てくるかもしれません。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第2夜。夏美を陰で見つめた謎の男2人組。そして・・・山崎吸血鬼としての目
今章は、某有名な探偵シリーズのキャラ2人が出てきます。

ジンの兄貴様と新一君です。新一君はジンの兄貴様のお気に入り
の設定です（笑）

またそれ以外の漫画のキャラも。

苦手な方はお読みにならない事をお勧め致します。
尚、後半には高杉さんと山崎さん出る予定です。

第2夜。夏美を陰で見つめいた謎の男2人組。そして・・・山崎吸血鬼としての目

夏美の愛車を見かけた銀髪の男。

すると助手席に座っていた青年がその男に「なァ・・・あの帝王の
黒猫で嘗てアンタと一時つるんでいた女ってあの女？」

その男はクククと笑い「あァ。多分そうだ。あいつは黒のベンツ21Bをあのも乗っていたからな。」と同時に「あの女の手でつて前から調べはついていた。あの車を見た時にはもう俺は小型カメラ付き盗聴器をしかけてあったのさ。」

青年は「ふん。そうか。で？何？」とつ捕まえるのか？」

「当たり前だろ？俺がみすみす逃がすとも思っているのか？」と再び男はニヤリと笑い青年を見て言った。

青年はクスと笑い「いや。全然。」そう言い男は満足したかのように黒のポルシェを走らせた。

この男の名はジン。高杉同様純血で・・・最も危険な吸血鬼として日本吸血鬼界や吸血鬼ハンター側からも標的？されている。尚隣にいるのは有名な高校生探偵工藤新一なのだが・・・ある事件をきっかけに

ジンに気に入られ側にいる。ちなみに彼は夏美同様人間である。

一方、夏美はワカバの隠れ家戻っていた。

電気をつけた後「！！！！」辺りを驚いた顔で見渡した。

そう家具とか少しずれているのだ。

夏美「・・・・・・誰かに嗅ぎつけられたね。」

いったい誰が・・・・？

まさか？晋助様？それとも兄貴？？そうでなかったら・・・・ジン？

?????

ソファーに座り込んで頭を抱えた。

すると夏美の携帯が鳴った。

ディスプレイを確認すると、セラス' となっていた。

夏美通話ボタンを押し「・・・私しやアだ。」

すると女の声で『あ、夏美さんですか？私です。セラスです。』

夏美苦笑いをし「お前さんからかけてくるなんて珍しいね。どつた？」

セラス・ヴィクトリアヘルシング所属のドラキュリーナ。夏美の知り合い。

セラス「・・・お仕事、です。至急日本支部に来ていただけませんか？」

夏美「・・・わあつたよ。今行くわ。」

そう言い携帯を切った。

すると一匹の派手目な蝶が夏美の隠れ家に入って来た。

夏美は其れを見て一瞬体が固まった。

そして小声で「……晋助様。」と呟いた。

と同時に夏美は携帯を取り出し電話をかけた「あ……相棒^{ライカ}か？私
しやアだ。チイと悪いが

ヘルシングの日本支部に来てくれねえか？私しやアもこれから行く
からよ。おう！すまないね！！

じゃ……後で。」そして携帯を切り閉じた。

と続け様に「さてと……ちよつくら行って来ますか。」そう言い
またタバコに火を灯しながら隠れ家を後にした。

一方、派手めな蝶は夏美の隠れ家を後にして主の下へと戻って行っ
た。

此処は東京にあるとあるホテル。

此処は日本吸血鬼界が管轄するホテルの一つである。

のとある部屋。高杉が窓を見て夜の風景を楽しんでいた。

そしていつの間にか夏美を監視していたのかククと笑い「・・・や
つと見つけたぜエ？俺の黒猫ちゃんよオ。」土方からの情報とそ
して・・・俺の監視蝶はどうやら間違っていなかった様だなア。」

そして部屋にあるキングダブルベットに寝かされている山崎の側に
歩きだした。

と同時に山崎が目覚めた。

高杉ククと笑い「よオ。退。やつとお目覚めかい？」

山崎は体を起こし「・・・高杉さん。」そう言い高杉の側にすり寄
って来た。

高杉はそんな様子を見てとても満足そうに山崎の頭をなでた。

と同時に山崎「・・・あの。起きたそうそう申し訳ないんですが・
・俺喉乾いちゃってもし高杉さんが

良ければ高杉さんの血欲しいんです。」と申し訳なさそうに言った。

高杉其れを聞いてニヤリと笑い「ああ……。構わねエよ。」そう言い山崎の顔を自分の首筋に寄せて

耳元で「ほら。・飲みなア。お前エが満足するまでなア。」と同時に山崎は高杉の首筋を舐め牙を立てて

血を飲み始めた。

第2夜。夏美を陰で見つめいた謎の男2人組。そして……。山崎吸血鬼としての目覚め完。

第2夜。夏美を陰で見つめいた謎の男2人組。そして・・・山崎吸血鬼としての目

今章も無事に更新完了致しました。

って結構長丁場でした（笑；；）

其れではほぼ毎回ですがグタグタ予告をどうぞ。

此処はヘルシング日本支部。

ヘルシング本部（因みにヘルシングは王立国境騎士団の事。イギリスからゲール（ゾンビみたいなもの）そしてその母体である吸血鬼（化け物フリース）から護る機関^{だそつた}日本支部はその配下にあたる。（因みに日本支部は此方が勝手に作らせていただきましたオリ支部です（笑；；）原作にはありません。のでご注意を・・・）
夏美とライカはこの支部員でもある。

此処は日本支部の支部長室。本部から局長であるインテグラがやって来た。

其処に夏美とライカが居た。

夏美「お忙しい中わざわざご来日有難うございます。インテグラ様で？

何用でしょうか？」

インテグラ葉巻に火を灯し「いや。此方も此方で忙しい中悪いな2人とも。」と続け様にある資料を2人に見せながら「・・・実はな。此処日本でも

グールが多発している事が明らかになってな。」

夏美達は其れを聞いて驚く。

と続け様にインテグラ「・・・しかも、我々イギリスで出ている単なるグールではなく、'人工グール'だ。」

其れを聞いてライカ「で、我々の今回の命令は何でしょう？
インテグラ局長。」

インテグラ「その人工グールの中にはチップが埋め込まれているそう
うだ。

其れを退治しチップを回収し、'黒幕を'暴き出してほしい。其れが
今回の

お前達の命令だ。」

夏美とライカインテグラに一礼し「命令受けたまりました！！
マイスター
我が主！！」と同時に夏美「で？場所は？」

インテグラ「お前達のワカバの管轄内であるワカバ港だ。此れはオ
ウガにも

すでに許可得ている！！すぐに向かってくれ！！」

夏美とライカ「はっ！！」そう言い夏美達は支部長室を出た。

と同時にセラスに「セラス！お前も向かってくれ！アーカードと共に
な。」

セラス「了解！！」そう言いもう1人の主である。アーカードを呼

びに行きワカバ港へと向かった。

一方夏美達は夏美の愛車である黒のベンツ221Bでワカバ港に向かった。

夏美「チー！！ある意味面倒（面でエー）事になったなア！！」

ライカ「あア。まったくだ！しかし、イギリスが主に活動のグールが何故日本（此処）に？」

夏美「・・・其れを調べるのが今回の任務だ。」

ライカ「・・・そうだな。」

そう言い夏美の愛車は闇に消えて行った。

一方、ワカバ港には何故かすでに先客が居た。その正体は土方だ。

土方ククと笑い「・・・どうやら、ヘルシングも動き始めた様だな。だが、

此処は日本。人工グールどもの好きにはさせねエよ。ま、俺が手エ下さなくてもあいつ（夏美）がなんとかしてくれそうだが。只で帰るのは勿体ねエ

あいつには悪イがチイとばかり拝見させてもらっぜ？」そう言い陰に隠れて夏美達の到着を待った。

ライカ「第3夜。ヘルシング本部員そしてヘルシング日本支部員始動！？」

そして夏美達に潜む土方の影！？」「次章もどうぞよろしくな！」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第3夜。ヘルシング本部員そしてヘルシング日本支部員始動！？夏美達に潜む士

今章は、また違う漫画とのコラボです。ヘルシングです。

オリ要素がありますので苦手な方はご注意願います。

ひょっとしたら残酷シーン等ありの長丁場編集可能性あります。

因みにワカバ港はオリ場所です。その辺もご理解とご了承のほどよろしくお願い致します。

第3夜。ヘルシング本部員そしてヘルシング日本支部員始動！？夏美達に潜む士

此処はヘルシング日本支部。

ヘルシング本部（因みにヘルシングは王立国境騎士団の事。イギリスからグール（ゾンビみたいなもの）そしてその母体である吸血鬼（化け物フリークス）から護る機関^{だそつた}日本支部はその配下にあたる。（因みに日本支部は此方が勝手に作らせていただきましたオリ支部です（笑；；）原作にはありません。のでご注意を・・・）

夏美とライカはこの支部員でもある。

此処は日本支部の支部長室。本部から局長であるインテグラがやって来た。

其処に夏美とライカが居た。

夏美「お忙しい中わざわざご来日有難うございます。インテグラ様で？

何用でしょうか？」

インテグラ葉巻に火を灯し「いや。此方も此方で忙しい中悪いな2人とも。」と続け様にある資料を2人に見せながら「・・・実はな。此処日本でもグールが多発している事が明らかになってな。」

夏美達は其れを聞いて驚く。

と続け様にインテグラ「・・・しかも、我々イギリスで出ている単なるグールではなく、‘人工グール’だ。」

其れを聞いてライカ「で、我々の今回の命令は何でしょう？インテグラ局長。」

インテグラ「その人工グールの中にはチップが埋め込まれているそうだ。

其れを退治しチップを回収し、黒幕を、暴き出してほしい。其れが今回の

お前達の命令だ。」

夏美とライカインテグラに一礼し「命令受けたまりました！！我が主！！」と同時に夏美「で？場所は？」

インテグラ「お前達のワカバの管轄内であるワカバ港だ。此れはオウガにも

すでに許可得ている！！すぐに向かってくれ！！」

夏美とライカ「はっ！！」そう言い夏美達は支部長室を出た。

と同時にセラスに「セラス！お前も向かってくれ！アーカードと共に。」

セラス「了解！！」そう言いもう1人の主である。アーカードを呼びに行きワカバ港へと向かった。

一方夏美達は夏美の愛車である黒のベンツ221Bでワカバ港に向かった。

夏美「チィ！！ある意味面倒（面でエー）事になったなア！！」

ライカ「あア。まったくだ！しかし、イギリスが主に活動のグールが何故日本（此処）に？」

夏美「・・・其れを調べるのが今回の任務だ。」

ライカ「・・・そうだな。」

そう言い夏美の愛車は闇に消えて行った。

一方、ワカバ港には何故かすでに先客が居た。その正体は土方だ。

土方ククと笑い「・・・どうやら、ヘルシングも動き始めた様だな。だが、此処は日本。人工グールどもの好きにはさせねエよ。ま、俺が手エ下さなくてもあいつ（夏美）がなんとかしてくれそうだが。只で帰るのは勿体ねエあいつには悪イがチィとばかり拝見させてもらうぜ？」

そう言い陰に隠れて夏美達の到着を待った。

そして夏美達が到着した。

夏美辺りを見渡し「・・・今の所問題なさそうだな。相棒。」

ライカも頷き「・・・同感だ。だが、油断は禁物だ！相棒！」

夏美今一度タバコを取り出し火を灯しニヤと笑い「わあつてる！！」

そう言い「とりあえず見回ろう。」

するといつの間にか到着していたセラスが「夏美さん！！ライカさん！！3番倉庫でグール発見です。」

夏美とライカは其れを聞いてフツと笑い「了解！！」

そして、夏美達はセラスと共に3番倉庫に向い始めた。

すると・・・。

「夏美」。

夏美はその呼ばれた声に振り向くが・・・。

夏美「・・・・・・？」

セラスその夏美の様子を見て「・・・夏美さん？」

夏美ハッと我に戻り「・・・いや。すまん。何でもない。」

・・・「まさかな」？

そう心の中で呟き再び歩き始めた。

すると夏美達に見えないように隠れていた土方がククと笑いながらタバコに火を灯し「・・・相も変わらず勘の良い奴だな。」炎龍（あの頃）の勘は今でも抜けねエか。「面白エ」。そうでなければ面白くとも何ともねエ。」

なア・・・高杉イ。「お前の黒猫成長し続けているぜ？」

一方、ワカバ港の3番倉庫には派手めな蝶が飛んでいた。

「高杉の監視蝶」だ。

夏美達が到着した後夏美のみをじっとそしてずっと見ていた。

そして夏美は薄々感づいていたが「・・・ライカ。セラス。突入だ。そして、セラスは母体の吸血鬼を探してくれ。」

ライカ頷き、セラスも頷きながら「夏美さんは？」

夏美対フリークス（化けもの）武器ギンガ（シルバー色をした拳銃）を懐から取り出し「ライカと一緒に（人工）グールを始末する。グール共を始末すれば多分人工グールも判明する事が出来るだろうよ。」

と続け様に「その間に母体も始末してくれ！」

セラスニヤリと笑い「了解！！（ヤー！！）」

そして3人は中に入って行った。

と同時にグール共が一斉に現れた。

夏美今まで吸っていたタバコを消しまた懐から新しいタバコをもう一本取り出し火を灯しニヤリと笑い

「おいでなすったかい？グールさん方。さア・・・狩り（ゲーム）の始まりだ！！！！レクイエムをくれてやるよ！！！！行くよッ！！

「！！相棒！！！！」

ライカもニヤリと笑い「あいよッ！！相棒ッ！！」そう言い氷棒で夏美と共にグールを始末し始めた。

一方、セラスは「第3の眼」で「母体の吸血鬼」を探していた。

すると女の声でクスクス「誰かをお探しかい？」「ヘルシングのドラキュリーナ女吸血鬼のお嬢ちゃん？」

セラス其れを聞いてその声の主に眼をやりクスと笑い返し「えエ・・。実は「そうなんです。」「グールの宿い主さん？」と声を返した。

第3夜。ヘルシング本部員そしてヘルシング日本支部員始動！？夏
美達に潜む土方の影！？完。

第3夜。ヘルシング本部員そしてヘルシング日本支部員始動！？夏美達に潜む士

今章も無事に更新完了致しました。

結構長めで申し訳ありません（汗）

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑；）

女吸血鬼クス「あらあら・・・良くわかったわね？私が‘グール’を作り出した吸血鬼だと。」

セラスクスと笑い「だって、グール確認中に貴女の姿もチラって見えたものですから。」

女吸血鬼「流石に、ヘルシングの飼っている吸血鬼だねエ。でも、なんでだい？同じ‘同志’じゃないか？何で‘人間に味方するの’？」

其れを聞いてセラスクスクスと笑いながら「貴女方と一緒にしないで頂けます？此方には此方とて‘事情が’あるのでね。マスター。夏美さんに始末しろって言われたんですが・・・始末しても良いですよね？」

すると後ろからセラスの主である全身赤づくめの男アーカードが現れニヤリと笑い「良いとも。やれセラス。」

セラスハルコネを取り出し「了解！！（ヤー！！）マイマスター

「！！」

そう言い女吸血鬼に狙いを定めた。

女吸血鬼は急に笑い出し「私1人だと思ったのかい？大間違いだよ！！」

そう言い仲間を呼んだ。だが…一人も来ない。

するとセラス達の背後から夏美達が現れてライカがニヤリと笑い「悪いね？」

女吸血鬼さん？アンタの相棒はうちらが、始末したよ。」

女吸血鬼悔しそうに顔しかめて逃げ出そうとした次の瞬間セラスはハルコンネの引き金を引いた。

そして散りとなった。

夏美ある袋を取り出し「・・・グールの中に約数名、問題の人工グールが居たので頭に埋め込まれたチップを取り出しました。此れがそうです。アーカードさん。」そう言い小さな白いチップが入った袋を渡した。

アーカード受け取り「御苦労！夏美、ライカ！此れで今回の任務終了だな。（ミッションコンプリート）だな。」と続け様にセラスに袋を渡して「セラスもご苦労だった。此れをインテグラに渡しておけ。」

セラス、アーカードから袋を受け取り「はい。マスター。」

そしてアーカード夏美達に視線をやり「戻るぞ。」

夏美達は頷きワカバそしてヘルシングへと戻って行く。

すると第3倉庫から出てきたライカ達と共に出てきた夏美はまだ高杉の監視蝶を見て顔を少しだけひきつらせた。

遠くから「相棒!!!」とライカの声がした為夏美は慌てて戻って行った。

その様子を蝶の眼から高杉が山崎とそしていつの間にか戻って来ていた土方と共に見ていた。

高杉ククと笑い「・・・流石だな。夏美ィ。俺の事に勘づくとはなァ。流石は・・・」

‘俺の黒猫だ。’もう飼い主（俺）から逃げれると思っなよ？

連れ戻して退同様‘あの時同様にたつぷり可愛がってやらァ。’

セラス「第4夜。夏美達ひとまずヘルシングの任務終了？そして、夏美に迫る高杉の魔の手？」「次章もどうぞ宜しく願います！」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第4夜。夏美達ひとまずヘルシングの任務終了？そして、夏美に迫る高杉の魔の

今章は前章の似た様な話です。

此方も前章と同様に長丁場のもしかしたら編集可能性あります。

残酷シーンありのも予定。

後半あたりに高杉さん方が出ます。

第4夜。夏美達ひとまずヘルシングの任務終了？そして、夏美に迫る高杉の魔の

一方、セラスはと言うと・・・・・・・・・・。グールの元凶である母体の女吸血鬼と対峙していた。

女吸血鬼クス「あらあら・・・良くわかったわね？私が‘グール’を作り出した吸血鬼だと。」

セラスクスと笑い「だって、グール確認中に貴女の姿もチラって見えたものですから。」

女吸血鬼「流石に、ヘルシングの飼っている吸血鬼だねエ。でも、なんでだい？同じ‘同志’じゃないか？何で‘人間に味方するの’？」

其れを聞いてセラスクスクスと笑いながら「貴女方と一緒にしないで頂けます？此方には此方とて‘事情が’あるのですね。マスター。夏美さんに始末しろって言われたんですが・・・始末しても良いですよね？」

すると後ろからセラスの主である全身赤づくめの男アーカードが現れニヤリと笑い「良いとも。やれセラス。」

セラスハルコネを取り出し「了解！！（ヤー！！）マイマスター！！！」

そう言い女吸血鬼に狙いを定めた。

女吸血鬼は急に笑い出し「私1人だと思ったのかい？大間違いだよ！！」

そう言い仲間を呼んだ。だが…一人も来ない。

するとセラス達の背後から夏美達が現れてライカがニヤリと笑い「悪いね？」

女吸血鬼さん？アンタの相棒はうちらが、始末したよ。」

女吸血鬼悔しそうに顔しかめて逃げ出そうとした次の瞬間セラスはハルコンネの引き金を引いた。

そして散りとなった。

夏美ある袋を取り出し「・・・ゲールの中に約数名、問題の人工ゲール」が居たので頭に埋め込まれたチップを取り出しました。此れがそうです。アーカードさん。」そう言い小さな白いチップが入った袋を渡した。

アーカード受け取り「御苦労！夏美、ライカ！此れで今回の任務終了だな。（ミッションコンプリート）だな。」と続け様にセラスに袋を渡して「セラスもご苦労だった。此れをインテグラに渡しておけ。」

セラス、アーカードから袋を受け取り「はい。マスター。」

そしてアーカード夏美達に目線をやり「戻るぞ。」

夏美達は頷きワカバそしてヘルシングへと戻って行く。

すると第3倉庫から出てきたライカ達と共に出てきた夏美はまだ高杉の監視蝶を見て顔を少しだけひきつらせた。

遠くから「相棒！！！」とライカの声がした為夏美は慌てて戻って行った。

その様子を蝶の眼から高杉が食事後の山崎とそしていつの間にか戻って来ていた土方と共に見ていた。

高杉ククと笑い「・・・流石だな。夏美イ。俺の事に勘づくとはなア。流石は・・・。」

「俺の黒猫だ。」もう飼い主（俺）から逃げれると思うなよ？

連れ戻して退同様「あの時同様にたつぷり可愛がつてやらア。」

山崎高杉の膝もとに寄り添って「・・・あの子何か「危険な香り」していますよ？高杉さん。」

高杉其れを聞いてクククと笑いながら山崎の頭を撫でて「「危険な香り」ねエ。まア・・・間違っちゃアいねエ」よ。退。」

土方もククと笑い「『違いねエ』。何せ、あいつは……昔チイと『闇に居たんだからな』。」

山崎其れを聞いて土方に顔向け「え？そんなんですか？土方さん？でも、彼女『人間』ですよ？」

山崎のその問いに土方タバコに火を灯しククと笑い「……確かにあいつは『人間だ』。だが、それ以前に

『表ではなくて』、『闇で生きてきた』。『心が表から闇に潜んでいた時期』があつたのさ。『そう言いながら高杉達と同じソファーに座りながら続け様に』……だが、ある時突然闇から表へと移り住んだのさ。何故そうなったのかは知らねエが……。まア……あいつは元はと言えば所詮闇いくら闇の人間が表に移り住もうが『やって行けねエよ』。」

高杉も其れを聞いてクククと笑い「……『違いねエ』。」

一方、高杉達が話をしていた夏美はと言うと。

先程の任務内容をインテグラに伝え自分の部屋に戻りソファーに座りタバコを吸っていた。

もちろん。高杉達もその様子を見ていた。

すると夏美の携帯が鳴った。

夏美は携帯を取り出しディスプレイを見た。

其処には‘非通知’となっていた。

夏美は一瞬顔をしかめたが携帯の通話ボタンを押し「・・・はい。橘。

」

すると低い男の声で「・・・よオ。炎龍。いや、今は止めて橘夏美に戻ったのか。」

夏美その声を聞き驚きながら「・・・まさか。貴方はジンさん!？」

電話の主はククと笑い『ご名答。俺だ。』

夏美はその声の主を聞き驚き固まっていた。

第4夜。夏美達ひとまずヘルシングの任務終了?そして、夏美に迫る高杉の魔の手?完。

第4夜。夏美達ひとまずヘルシングの任務終了？そして、夏美に迫る高杉の魔の

今章も無事に更新完了致しました。

今章も御付き合い下さいましてありがとうございます。

其れではほぼ毎回ですがグタグタ予告をどうぞ（笑）

夏美の携帯にかかって来た一通の電話。

其れは嘗て一時側にいた男ジンからだった。

ジン笑いながら『どうした？久々の会話なんだ。そんなに警戒するなよ。』

53

夏美「……………」今更何用です？」

ジン『…連れねエな。昔俺に「高杉同様、懐いていたのによ。』

夏美は其れを聞いて思わず黙り込んでしまった。

突然かかって来たジンは何が目的なのか？？

夏美「第5夜。突然夏美にかかって来た閻^{ジン}の電話。」「次章もどうぞ宜しくね！」

以上です。其れでは次章も今章同様お楽しみ頂ければ幸いです。

第5夜。突然夏美にかかって来た闇（ジン）の電話。そして新一吸血鬼化、そ

今章は、主に夏美とジンの兄貴様との会話のやり取りになります。

サブタイトル多少此ちらも変更させて頂きました。

長丁場の編集可能性あります。コラボ苦手な方はお引き取り頂く事をお勧め致します。尚、後ほどまたキーワードに加えさせて頂く予定ですが、（ご存知のない方がもしいましたら申し訳ございません。汗）また他の漫画「闇色の愛人」と言う漫画の要素も多少入れさせて頂く予定です。

この漫画はBL漫画で吸血鬼と人間の青年の恋？の物語です。もしご興味のある方はアクアコミックス様からだったと思うのですが本屋さん等に売られていると思いますのでもし宜しければどうぞ。私の最近の吸血鬼漫画でお気に入り？の漫画です。此処からは独り言です。（笑……）コラボするの楽しい。と思う今日この頃。大変だけど……（笑……）長い前書きで申し訳ありません。其れでは本編へどうぞ。

第5夜。突然夏美にかかって来た闇（ジン）の電話。そして新一吸血鬼化、そ

夏美の携帯にかかって来た一通の電話。

其れは嘗て一時側にいた男ジンからだった。

ジン笑いながら『どうした？久々の会話なんだ。そんなに警戒するなよ。』

夏美「……………今更何用です？」

ジン『…連れねエな。昔俺に、高杉同様、懐いていたのによ。』

夏美は其れを聞いて思わず黙り込んでしまった。

夏美……。

今更なんだ。どうしてこの男はあの男キトはあの方同様に私を解放してくれないのだろう？

すると夏美「・・・其れは、昔の事、今は、違いますよ。」と続け様に「其れに、貴方も貴方にとってもう、私より大事な者、が出来たんじゃないですか？だったら・・・もう私に構わないでくださいよ。」

ジン『そいつは出来ねえ相談だ。何せ、俺の、大切な奴、もお前の事気になっているからな。』

夏美「・・・そうですか。でも、あまり私にかかわりすぎるとろくな事ないですよ？其れでは。」

そう言い電源を切った。それも一方的に。

一方、ジンは隠れ家の一つで新一と一緒にいた。

ジンクククと笑いながら「かわりすぎるとろくな事ネエってか」。「そう言いながらタバコに火を灯した。

するとシャワーをいつの間にか浴びていた新一が着替えを終えてジンの側に寄って来た。

そしてジンの肩にすり寄って来た。

ジンはその様子を見てククと笑い新一の頭を撫でて「お前、まるで猫見てエだな。」

新一クスクス笑い「そうかもな。だって、俺はジンの『猫』だから。其れも『黒猫』。」

ジン其れを聞いて笑いながら「・・・そうだな。お前は、『俺の黒猫』だ。」

「そう言いタバコを灰皿にもみ消し新一を抱き寄せて「なア・・・新一。」

新一「何？」

ジン耳元で「腹がすいた。お前の血飲ませろよ。」と囁いた。

新一クスと笑い「良いよ。だって俺は・・・さっきも言ったように「ジンの黒猫^{もの}」だから。」

其れを聞いたジンは満足そうな笑みを浮かべながら新一の首元に顔をうずめ舐めて牙を立てた。

新一痛みで顔がしかめる。

その痛みは・・・いつの間にか快樂へと変わっていった。

ズズズと。ジンが新一の血をすすする音がする。

其れもずっと・・・。

すると新一はジンのコートの袖をつかみ「・・・ジ、ジン。もう。」
そう言いつた。

と同時にジンの顔がようやく新一の首元から離れて「ごちそうさん。」
そして新一は崩れるようにジンの膝へと堕ちて行った。

そしてジンは新一の頭を再度なでながらククと笑い「夏美^{あいつ}もお前みたいになれればいいのによ。」と呟きながら新一に「なア・新一。お前も俺と、同じものになるか？」

新一は息切れしながらも「・・・ジンと、これからずっと一緒に入れるなら、俺も墮としてよ。」

其れを聞いたジンはニヤリと笑い「墮としてやるよ。お前はこれからもずっと俺のものだ。」

そう言い自分の腕に咬みつき血を口に含み新一を前に向けさせて新一に口づけした。

そして口移しで己の血を新一に飲ませた。

新一の体にジンの血が巡る。

そして新一は眼を閉じた。

其れも眠るように。

ジンニヤリと笑い「お休み、俺の新一。」そう言い新一のおでこに軽くキスをした。

もう、此れで俺からは完全に逃げられねえぜ？と心の中で呟いた。

一方、夏美はと言うと・・・。

相も変わらず自分の部屋のソファで座っていた。

そしてまたタバコに火を灯す。

すると外が騒がしくなっていた。

夏美「・・・！！！！」気づきながらそして気になったのか目を閉じる。

火炎風拳火炎風透視術。

（火炎風拳の事は・・・銀魂連載また他連載で詳しく書いていると思っのでそちらをどうぞ。）

夏美は一転に気を集中した。

‘何かがある’。‘・・・何か’。

するとワカバやヘルシングの日本支部から少し離れた山林に豪華な屋敷があつた。

この屋敷は夏美も知っていた。

そして灯がともっている事に気づく。

・・灯？何で？此処は誰も住んでいなかったはず。

夏美は透視を続けた。

すると螺旋階段を通り過ぎてひとつのドアに辿り着くそしてドアの中の部屋を透視する。

其処はリビングだった。

辺りにはろうそくが何本も蝋燭立てに立っていた。

・・ろうそく？

そしてそのろうそくから少々かけ離れた所に豪勢なソファがあり
1人の男が横になりながら手すりに

腕を立ててくつろいでいた。

黒髪の男で両耳の所がとんがっていた。

赤のシャツそして全身黒ずくめで覆っていた。

黒のコート兼マント。そして黒のズボンそして黒の靴。

夏美その男を見て妙に勘づいた。

「・・・この男危険な香りがする。あの方と兄貴もジンもアーカードさんもそうだけど、それ以上に。」

「危険だ。何故か知らないが・・・私の頭の中で『警告音』がなっていた。」

するとその男は夏美が透視（見ている事）に気づいたのか眼を開け夏美の方を見た。

夏美「・・・!!!!!!」

そしてニヤリと笑った。

夏美は其れを見て此れ以上は危険だと判断し透視を終えた。

そして冷や汗をかきまくって短くなりかけたタバコを吸い始め「・・・ヤバイ！」透視（見る）んじゃないかったなア」。こりゃアある意味あの方々より「たち」が悪いな。さて・・・どうしようか。」

すると相棒であるライチユウが現れ「・・・夏美様。」

夏美ライチユウの登場に驚き「おわあア！！いきなり出てくるなよ！！びつくりしたよ！！」

ライチユウ苦笑いをし「ごめんなさい。夏美様。でも・・・タバコもう短くなりすぎてますよ？」

夏美慌てて灰皿にもみ消したそして事前に用意していたアイスティーを飲みながらまたタバコに火を灯す。

そしてライチュウに何かあったのかを聞かされそして夏美は話した。

と同時にライチュウに「・・・相棒よ。1人であの山林に行くな？危ないから。」

ライチュウ其れを聞いて頷いた。

だが・・・此れが夏美を再び闇へと誘う原因の一つにもなる事を彼女自身は知らずにいた。

第5夜。突然夏美にかかつて来た闇^{ジン}の電話。そして新一吸血鬼化、そして夏美が透視していた謎の男。完。

第5夜。突然夏美にかかって来た闇（ジン）の電話。そして新一吸血鬼化、そ

今章も無事に更新完了致しました。

其れではほぼ毎回恒例のグタグタ予告をどうぞ（笑；）

そしてアレから夏美は再びヘルシングの日本支部に呼ばれ再びイン
テグラの
オーダー
命令を受ける。

その命令内容は何と先程の透視していた山林の豪勢な屋敷の内部調
査みたいなものだった。

其れも夏美1人で・・・。

あいにくライカはこの任務ではワカバの別件で動く事になってしま
い、

アーカードとセラスは他のヘルシングの仕事があり動けない。

たまたまワカバのオフだった夏美に白羽の矢が立った。

其れを聞いた夏美は本来なら乗り切じやなかったがヘルシングの局
長直々の命令だから断るわけにもいかなかった。と言うより断れな
かった。

そして・・・夏美は支部長室から自分の部屋に戻ってソファーに座り
頭をかきながらため息をつき「・・・いやア、参っちまったな。飛
んだ、仕事だ、」。

あそこの屋敷に行かなきゃならねエなんて・・・こりゃア何か嫌な

予感がするな。」そして仕事の準備に取り掛かった。

一方、此処は山林の中にある屋敷。

夏美が透視していた男は逆に夏美を透視していた。

そしてククと笑い「・・・今宵は楽しくなりそうだ。」と続け様に

「さア・・・早く私の所に来い。『橘本家の小娘』。」

その男は何と夏美を知っていた。だが・・・夏美自身は知らずにいた。

そしてそのリビングに一人の青年が入って来て男の側に寄り添う。

果たしてこの2人の正体とは？

夏美「第6夜。夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内部調査？」と同時にある危険な香りを持つ男に会う？（前編）
「はア・・・何でこんなことになるのかね。次章もどうぞ宜しくね。」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみただければ幸いです。

第6夜。夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内部調査？と聞

今章は前章と似た様な話です。（コラボ要素あり）

長丁場と編集可能性あります。

因みにライチユウも出演予定です。（キーワードに書ききれないので一応、

ポケ要素もあります。ごめんなさい汗）

其れでは本編へどうぞ。

第6夜。夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内部調査？と聞

そしてアレから夏美は再びヘルシングの日本支部に呼ばれ再びイン
テグラの命令オーダーを受ける。

その命令内容は何と先程の透視していた山林の豪勢な屋敷の内部調
査みたいなものだった。

其れも夏美1人で・・・。

あいにくライカはこの任務ではワカバの別件で動く事になってしま
い、

アーカードとセラスは他のヘルシングの仕事があり動けない。

たまたまワカバのオフだった夏美に白羽の矢が立った。

其れを聞いた夏美は本来なら乗り切じやなかったがヘルシングの局
長直々の命令だから断るわけにもいかなかった。と言うより断れな
かった。

そして・・・夏美は支部長室から自分の部屋に戻ってソファ―に座り
頭をかきながらため息をつき「・・・いやア、参っちまったな。飛
んだ「仕事だ」。

あそこの屋敷に行かなきゃならねエなんて・・・こりゃア何か嫌な
予感がするな。」そして仕事の準備

に取り掛かった。

一方、此処は山林の中にある屋敷。

夏美が透視していた男は逆に夏美を透視していた。

そしてククと笑い「・・・今宵は楽しくなりそうだ。」と続け様に

「さア・・・早く私の所に来い。『橘本家の小娘』。」

その男は何と夏美を知っていた。だが・・・夏美自身は知らずにいた。

そしてそのリビングに一人の青年が入って来て男の側に寄り添った。

男はその青年を見てククと笑い頭を撫でた。

青年は嬉しそうにその男にすり寄る。

そして男を見て「ねエ・・・何を透視（見ているの）？」ディーン
？」その男の名を呼んだ。

ディーンと呼ばれた男はニヤリと笑い「何、お前と似たような境遇」を持った奴を透視（見ている）のさ。先程そいつに「透視（見られていたからな）」玲。」

玲と呼ばれた青年は「ふん。で？その人来るの？」

ディーンはククと楽しそうに笑い「ああ。そうみたいだ。」

まさか、ヘルシングの狗になっていたとはな。橘家本家の小娘。

お前は私自身を覚えているかどうかは知らんが、私はお前の事を覚えてるぞ？

さア・・・早く来るがいい。

歓迎してやろう。

一方夏美は。愛銃であるギンガを懷に忍び込ませてそして腰元には愛刀である翡翠刀を差して「・・・よし！行くか。」と言い部屋を出て行った。

そして夜間と言う事もあり愛車である黒のベンツ221Bに乗り込み山林の屋敷に向かった。

すると助手席にはライチュウがちょこんと座っていた。

夏美は珍しく険しい顔しながらの運転だった。

ライチュウは心配そうにみる。

・・・こんな険しい状態での運転は夏美様には珍しい事だ。

一体どうしたんだろう？

すると山林の国道に一台の信号があつた。

色は赤だったので止まって灰皿を取り出し窓を開けタバコに火を灯す。

ライチュウ夏美を見て『・・・あ、あの夏美様？』

夏美「ん？どうした？相棒？」

ライチュウ聞きずらそうに『・・・先程は珍しくいつも以上に険しい顔で運転なさっていましたか何かありましたか？』

夏美苦笑いをしてタバコ吸いながら「……さっきの、アレ関係さ、ライチュウ。透視してから……」
何故かわからんが冷や汗が止まらなくてね。恐ろしいくらいにさ。
其れに、私しゃアのこの「妙な勘」は
自分で言うのも何なんだが結構「当たっちゃう」んだ。何故か知らんがね。」

そう言い信号青になったのを確認し愛車を走らせる。

其れからは2人には会話がなかった。

いや……正確的には「出来なかった」って言った方が「正しいのかもしれない。」

そして、時間がたつにつれて山林に入り夏美自身が透視（見た）屋敷に着いた。

屋敷から少々離れた場所に愛車を止める夏美そしてタバコを灰皿にもみ消し灰皿をしまい愛車から下りる。

其れに続きライチュウも下りた。

そして夏美武器を最終確認しライチュウに「良いかい？」やばそうな状態' になったら即逃げるよ?。」

事前にインテグラから危険と察知したら自己判断で構わないから戻れと指示を仰いでいた。

ライチュウ頷き『・・・了解です。』

そして夏美其れを確認すると意を消して「よし!じゃ・・・行くか!」

そう言い屋敷のドアに向かった。夏美は一応念の為ノックしようとしたが・・・。

ギィィと勝手にドアが開いた。

夏美とライチュウは驚いた。

そして、ライチュウ夏美を見て『・・・夏美様。』

夏美冷や汗かきつつもニヤリと笑い「・・・どうやら、歓迎」されているみたいだ。だが、油断は禁物さね。」

そう言いそして、その屋敷に入って行った。

夏美「・・・・・・・・。」

あまりにも、独特の雰囲気、に緊張感が走る。

と同時に螺旋階段からコツコツコツと足跡が聞こえた。

夏美その音を聞きライチュウに後ろに隠れるよう指示し懐からギンガを取り出した。

其処には夏美が透視した男ディーンが下りてきて手を差し伸べ「良い夜だな。歓迎しよう。」と言った。

夏美はその男を見て警戒心を募らせていた。

第6夜。夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内
部調査？と同時にある危険な香りを持つ男に会う。（前編）

第6夜。夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内部調査？と聞

今章も無事に更新完了致しました。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑）

ワカバとヘルシング日本支部の近くの山林にある屋敷。

其処にヘルシング日本支部の「命令」^{オーダー}で内部調査？で来ていた夏美とその相棒である「天然ボケ電気ネズミ」コラ（笑）事ライチュウ。その2人の前に現れた黒髪の男。夏美はライチュウに後ろに隠れるよう指示しそしてギンガを取り出して「警戒心」を露わにしていた。夏美の自身の中に「このまがまがしい気配。この男かなり危険だ。あの方々以上に。危険な香りがする。そして、心臓の音が早くなつてた。」

そして男はククと笑い「・・・そんなに警戒するな。橘家本家の小娘。」

夏美は其れを聞いて驚きを隠せないでいた。と続け様に「・・・何故私が、橘家本家の人間だと知っているんです！？」

その問いに男はククと笑い「どうやら本当に覚えていないようだな」。私は、昔約10数年前くらいか。「お前と会っている。」「お前の嫌いな満月の夜」にな。」

夏美其れを聞いて驚いた。な！！！！何！？私しやアはこの男と「会っている」！？約10数年位前だと？其れは確か、私らワカバと広州の大戦の時だ。其れも嫌いな満月の夜だと！？でも、何故・・・この男は私しやアが満月の夜が嫌いだって知っているんだ！？と内心焦っていた。

果たしてこの男と夏美の「関係とは」！？

其れを聞いていたライチュウも焦っていた。

ライチュウ『第7夜。夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内部調査？と同時にある危険な香りを持つ男に会う。（後編）』

『次章もどうぞ宜しくお願い致します！！』以上です。
其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第7夜。夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内部調査？と聞

今章は前章の引き続きになる予定です。長丁場ともしかしたらまた編集可能性あります。ご了承のほどよろしくお願い致します。

此方に書かれている香港はオリジナル地名で・・・一応アジア設定です。（笑）

で、その管轄している吸血鬼界の組織が香煉館です。

オリジナル要素苦手な方はお退き頂いた方がよろしいかと思われます。

其れでは本編へどうぞ。

第7夜。夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内部調査？と聞

ワカバとヘルシング日本支部の近くの山林にある屋敷。

其処にヘルシング日本支部の‘命令’^{オーダー}で内部調査？で来ていた夏美とその相棒である‘天然ボケ電気ネズミ’コラ（笑）事ライチュウ。その2人の前に現れた黒髪の男。夏美はライチュウに後ろに隠れるよう指示しそしてギンガを取り出して‘警戒心’を露わにしていた。夏美の自身の中に‘このまがまがしい気配。この男かなり危険だ。’あの方々以上に。危険な香りがする。そして、心臓の音が早くなつてた。

そして男はククと笑い‘・・・そんなに警戒するな。橘家本家の小娘。

夏美は其れを聞いて驚きを隠せないでいた。と続け様に‘・・・何故私が、橘家本家の人間だと知っているんです！？’

その問いに男はククと笑い‘・・・どうやら本当に覚えていないようだな’。私は、昔約10数年前くらいか。‘お前と会っている’。‘お前の嫌いな満月の夜’にな。’

夏美其れを聞いて驚いた。な！！！！何！？私しやアはこの男と‘会っている’！？約10数年位前だと？其れは確か、私らワカバと広州の大戦の時だ。其れも嫌いな満月の夜だと！？でも、何故・・・この男は私しやアが満月の夜が嫌いだって知っているんだ！？と内心焦っていた。

其れを聞いていたライチュウも焦っていた。

夏美はあまりにも内心焦り続けていた為行き成りその男に向かって

ギンガを威嚇発砲してしまった。

だが、軽くかわされてしまった。

夏美「・・・チッ!!」と軽く舌打ちをした。

すると後ろの方で「ディーン!!」とその男を呼ぶ声がして玲が慌てて側に駆け寄って来て「大丈夫?」

ディーンは玲を見てフツと笑い「ああ。問題ない。」すると玲夏美を見て「行き成り発砲するなんてひどいね。」

夏美「・・・銃声が聞こえた?それとも、透視(見え)、んのかな?」

玲フツと笑い「僕は、人間、君と同じ。だけど・・・残念ながら君と同じ能力は持っていないよ。」

夏美「・・・そうかい。」

・・・ヤバいな。私じゃアらしくもねエいらだちと焦りが支配する。

それに・・・あの青年はあの男をディーンって呼んだ。

約10数年前・・・妙に引っ掛かるな。

だけど、此処はどの道退いた方が良いね。

すると夏美の携帯が鳴った。

しまった！！電源切り忘れた！！

こんな時に誰だよ！！そう呟きで見えない程度にディスプレイを開け「セラス」となっていた。

夏美「・・・・。」瞬間移動を使い。2人に見えない所まで行きタバコに火を灯し電話に出た「・・・私じゃアだ。」

すると電話越しにセラスが慌てて『夏美さんッ！！別の任務中に大
変に申し訳ありません！！緊急事態発生です！！』

夏美「・・・どうした！？何があつた！？」

セラス『・・・ドイツ第三部隊のゲール共が知らぬ間に日本に入りワ
カバ港を占拠しています！！』

夏美驚いて「・・・ドイツだ、第三部隊って・あのメガネのデブ少佐
か！？」

セラス『は、ハイ！！そうです！！其れが香港^{シャンゴン}の吸血鬼界と手を
組んで大戦争を引き起こすつもりです！！人工ゲールの繁殖先も
香港だと。』

夏美は軽く舌打ちし「香港っていつたら・・・確か香煉館^{シャオレンカン}の連中共が
管轄する所だよな？」

セラス頷き『・・・ハイ。で、奴らも日本入りしているとの情報も。しかも館長である黒龍がいるんです。』

夏美其れを聞いて慌てて頭を抱え「・・・黒龍だと。」

あいつは嘗て隼人が炎龍だった時の相棒じゃないの。

んでもって・・・隼人の事かなり気に入っていたみたいだ。

そして純血吸血鬼。

そしてセラスが驚愕の事実を話した『・・・で、申し上げにくいのですが、あいつは夏美さんが炎龍だった事を知っています。』

夏美は其れを聞き「な、何だとオオ!!?」

セラスは『・・・ハイ。其れはそうと早く来て下さい!!』

夏美「・・・行きたいのは山々なんだが、ここの屋敷の主さんがそう簡単に行かせてくれなさそうだ。

まア・・・出来るだけ早くいくよう善処するよ。」そう言い携帯を切った。

そしてライチュウを見て「・・・相棒。この近くにムクホークを止まらせておいている。先にワカバ港へ行ってくれ!」

ライチュウ『・・・夏美様はどうされるんです?』

夏美苦笑いをし「私じゃアは、もうちょっとだけ此処に残るさ。いや・・・こう言った方が正しいね。

「残らなきゃならない」。って。「するとギンガで窓を割り「早く行け!!」と指示を出した。

ライチュウは心配ながらも頷き『・・・分かりました。ではまた後ほど。』そう言い割れた窓を勢いよく飛び出しそして『ムクホーク!!』と仲間の名を呼び其れに合わせてムクホークが素早く来て飛び乗り『ワカバ港へ向かって頂戴!』ムクホーク頷き『了解!!』そう言いワカバ港へと向かって行った。

其れを見届けた夏美タバコを携帯灰皿にもみ消しフツと笑い『・・・悪いね。ライチュウ。セラス。どうやらワカバ港へ合流はもうちつと先になりそうだよ。』

そして再びギンガを構え直しながら辺りを見渡した。

夏美『・・・誰もいないか。』すると嫌ながらも透視を始めた。

すると次の瞬間夏美の体が「金縛りにあった」。

夏美「・・・んなー!!」

すると背後でディーンの笑い声がし「・・・私があの場所にずっといたと思ったら大間違いだぞ」？橘家本家の小娘。」

か・・・体が動かない!!!!!!

そして「しばらく眠るがいい」。「そう言われ夏美は意識を飛ばした。

ディーンは夏美を抱いて「久々の再会」なんだ。「再会を祝おうじゃないか」。「そう言い寝室へと

連れて行った。そしていつの間にか玲も合流しディーンと共に去って行った。

一方、ワカバの別件で動いていたライカは夏美の‘気’が不安な事に気づき。

「・・・相棒？」と心配そうに呟いていた。

一方、ワカバ港でドイツのグール達を蹴散らしていたアーカード、セラス。そしてベルナドット。

後から合流した夏美とこのライチュウそしてムクホーク。

ベルナドット「ああ！！！！夏の嬢ちゃんはまだ来ねエのかよ！！！！セラスの嬢ちゃん！！！！」

セラスハルコネで撃ちながら「・・・仕方ありませんよ。ベルナドットさん。だって、夏美さんインテグラ様から先に山林の屋敷の潜入調査の命令を受けられていたのですから・・・」

ベルナドット」でもよ。あの夏の嬢ちゃんだぜ？すぐ任務終えてくるはずなんだ。」

ライチユウ

・・・もしかして夏美様の身に何かあったんじゃないア。と焦っていた。

するとアーカードはニヤリと笑い「まア・・・良いじゃないか。たまにはこういうのも。奴は後から来るだろう。」

ムクホーク『・・・其れを願いたいですね。』そう言いブレイバードを出してグール共をなぎ倒していた。

・・・ご主人。

だが、ライチユウ達以外は夏美自身がディーンに捕らわれた事を知

らなかった。

一方、夏美はアレからディーンに捕まり寝室で寝かされていた。

ディーンは夏美の側に寄り添い頭を撫でていた。

玲「ねエ・・・その子の事知っていたんだ。」

ディーン「ああ・・・前に話したと思うがお前と似たような境遇さ。まア・・・こいつの場合約10数年位前だな。」

玲はディーンの側により「って事は年齢は僕と同じ位？僕は、10

年前辺りにディーンと初めて会った

んだから。」

ディーン玲を見て「ああ・・・そうなるかな。」

すると夏美は顔をしかめ始めた。

そう、夏美は「夢を見ていた」。彼女にとって「いやな夢」。

そしていつの間にか涙を流して「・・・母さん。」と呟いていた。

そう夏美は約10数年前に起こったワカバと広州の大戦を思い出していた。

そして・・・夜まで続きその日の満月の夜父大樹と母楓がその時に死んだ事。

自分の未熟さを改めて知った事。

その後嘗ての恋人も亡くした事。

そして、嘗ての姉貴分に憎悪を膨らませてしまった事。

さまざまな事が一気に頭の中でこった返していた。

と同時に「・・・待つて！！待つて！！父さんッ！！母さん！！
！」手を差し伸べ寝言を言い眼がさめた。

第7夜。夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内

部調査?と同時にある危険な香りを持つ男に会う。
(後編) 完。

第7夜。夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内部調査？と聞

今章は編集可能性は無かったですね（汗）まア・・・気まぐれになつて編集可能性もありますが・・・（笑；）今章も御付き合ひ下さり有難うございます。

其れではほぼ毎回ではありますがグタグタ予告をどうぞ。

アレから、ディーンに捕らわれ眠らされた夏美。

不意打ちにも夢を見た。そして目が覚め思わず起きあがり頭を抱え苦笑いをし

「・・・夢か。もう、‘夢何ぞア’見ないと思ったんだがな。」と続け様に目に手をやり「・・・涙か。此れもとうに朽ち果てたと思つたんだが。」と呟き

・・・一度闇に堕ちた私しやアでもまだ‘人間の感情’が残つていたんだな。

そして夢の中で出てきた黒髪の男。其れはまさしくディーンと同じ顔だった。

思いだした。私しやアはあの男の言つとおり会っている。しかも、ワカバと広州の大戦の後で両親が散つた後に。1人で走りまわっていた時だ。

其れも私しやアが嫌いな満月の夜に。なあんで夢ってこつても現実になつちまうんだねエ。あつていて何もかも笑えねえよ。

すると玲が来て「目が覚めた？」と続け様に水が入ったコップを渡ししながら「はい。大丈夫。毒なんて入っていないから。」とほほ笑んだ。

夏美は警戒しつつも水が入ったコップを受け取り「・・・有難う。」
そう言い飲み始めた。

玲「ねエ・・・君さ。結構警戒心が強いんだね。」

夏美「・・・『気になるかい？』そんなに？」

玲頷き「・・・『気になる』。」

夏美フツと笑い「・・・じゃア、そんなに気になるんだつたら。話すよ。此れは

ワカバのごく一部の仲間しか知らない。此れが『私しやアの下らん暗い過去』だよ。貴方には話せてもいいような気がするから。」
「そう言い玲の前で話し始めた。

夏美自身の「暗い過去とは？」

玲「第8夜。ディーンに捕らわれた夏美。そして夏美の夢と明かされる過去？」

「次章もどうぞ宜しくね。」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第8夜。ディーンに捕らわれた夏美。そして夏美の夢と明かされる過去？（前書

今章は、少々暗め入る予定です。

多分此方も長丁場の編集可能性あります。

ここでの循環は（適当でござんない。もどりの事です。）

第8夜。ディーンに捕らわれた夏美。そして夏美の夢と明かされる過去？

アレから、ディーンに捕らわれ眠らされた夏美。

不意打ちにも夢を見た。そして目が覚め思わず起きあがり頭を抱え苦笑いをし

「・・・夢か。もう、‘夢何ぞア’見ないと思ったんだがな。」と続け様に目に手をやり「・・・涙

か。此れもとうに朽ち果てたと思ったんだが。」と呟き

・・・一度間に堕ちた私しやアでもまだ‘人間の感情’が残っていたんだな。

そして夢の中で出てきた黒髪の男。其れはまさしくディーンと同じ顔だった。

思いだした。私しやアはあの男の言^トうとおり会っている。しかも、ワカバと広州の大戦の後で両親が散った後に。1人で走りまわっていた時だ。

其れも私しやアが嫌いな満月の夜に。なあんで夢ってこつても現実になっちまうんだねエ。あつていて何もかも笑えねえよ。

すると玲が来て「目が覚めた？」と続け様に水が入ったコップを渡

しながら「はい。大丈夫。毒なんて入っていないから。」とほほ笑んだ。

夏美は警戒しつつも水が入ったコップを受け取り「・・・有難う。」
そう言い飲み始めた。

玲「ねエ・・・君さ。結構警戒心が強いんだね。」

夏美「・・・『気になるかい』？そんなに？」

玲頷き「・・・『気になる』。」

夏美フツと笑い「・・・じゃア、そんなに気になるんだったら。話すよ。此れは

ワカバのごく一部の仲間しか知らない。此れが『私しやアの下らん暗い過去』だよ。貴方には話せてもいいような気がするから。」

玲「・・・その前に一つ聞かせて。何で君は、『戦っているの？』普通の女としての幸せ求めないの？」

夏美再びフツと笑い「・・・何で戦っているのかって？其れは私
しゃアの‘下らん暗い過去話’聞けばわかるよ。」と続け様に「何
で、普通の女として幸せを求めない理由もね。」

と続け様に何かを思い出し「・・・そうだ。私しゃアの火炎風拳火炎
風過去循環術があるからそいつを使ってみるかい？其れを使ってみ
るか？其れを使えば多分手っ取り早いよ。」と続け様に「・・・でも
此れ

うなされる可能性もあるから滅多に使わないんだ。其れでも良いな
ら。」

玲頷き「・・・構わないよ。」

夏美其れを見て「・・・OK！じゃ。行くよ。私の過去を彼に見せよ。
火炎風拳火炎風過去循環術！」

そう言い玲は眼を閉じた。

そして夏美「・・・今から約一時間くらいかな。私しゃアの‘下らん
暗い過去話’を見てきてもらっよ。」

何故、‘戦うのか’？何故、私しやアがこうなったのがきつと分かってもらえと思うよ、’？」

そして携帯の時計を見た。夕方4時になっていた。

「・・・夕方5時頃か。其れまでつらいもの見させると思っけど堪忍ね。」

と同時に夏美は気になったのかセラス達の様子を透視（見て）いた。

ワカバ港。アーカードが率いるヘルシングとプラス夏美んこの相棒であるライチュウ&ムクホークコンビがドイツ第三部隊のゲール共と香煉館とこの人工ゲールと対峙し続けていた。

夏美はその光景を見て軽く舌打ちし「・・・私しやアは、こんな緊急事態’に、相棒達の所’にも応援として行けねエのか！！」と掛け布団を握り締めた。

そして約一時間後……。玲が目覚める。

夏美玲を見て「……気がついたかい？」と続け様に玲を見て涙を流していた事に気づいていた。

夏美は其れを見て何故か知らないが申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

そして玲「……君も「なんだかんだつらい思い」しているんだね。」

夏美フツと笑い「……もう慣れたさ。」

玲「……でも、「そうは見えないけど。」

夏美「……それでも、私しやアは「戦い続けなきゃいけないんだ！」橘家本家の宿命故に」

そして自分自身の「過去」の鎖を断ち切る為に。見たでしょ？私の過去を。」

玲頷き「姉貴分の悲痛な裏切りにより……仲間を奪われしまいには両親も奪われ……恋人達さえも奪われ

そして自分の‘普通の女の幸せを’捨ててまで。」

夏美は思わず黙り込んでいた。

そしてベットから起きあがり窓のカーテンを少々開け窓を少し開け懐からタバコを取り出し火を灯した。

そして夏美「……夢の中で見た。玲さんだっけ？私しやアはあの男が言つとおり‘約10数年前位’にあの男と会っている。もう、広州との大戦でワカバの末端だった頃に会っているんだ。其れも満月の夜に。両親が散つていったのも満月の夜なのさ。」

玲「……夏美さん。」

夏美両目を閉じフツと笑いながらタバコを吸い続けていながら「……此れで‘分かつたろ’？何で私しやアが基本的に‘ワカバ以外の人間を警戒するのか。’其れは、信じる事があの時以来出来なくなつたからだよ。」

そして夏美はタバコを灰皿にもみ消し「……さてと。‘お話はおしまい’。私しやアはまた‘戦場へ’戻らなきゃいけないからさ。」
そう言い支度し始め、「……私しやアン所の（ワカバ）の管轄内で大変な事が起こっているんだ。リーダーとして幹部として行かなき

やならん。」「そう言いギンガを懷にしまいこみ
部屋を出ようとした。

すると玲が「・・・僕は、構わないんだけど。」「彼は逃がさない
んじゃないかな」？」

夏美「・・・だったらギンガ（こいつ）で一発さつきみたいにする
だけさ。」「と続け様に「私しやアが嫌いな事は相棒達を傷つけられ
る事だ!!」「そう言い今度こそ部屋を後に玄関へと走りそして扉を
開けようとした次の瞬間夏美の顔がしかめた。

するとディーンが再び夏美に金縛りをかけていた。

夏美「・・・ッ!!!!!!クソッ!!!!!!」

ディーンは夏美に近づき耳元で「・・・玲から逃げれても私から逃
げれると思うなよ」？」と囁いた。

夏美必死でもがこうとした。

クソ……！こんな時に……！こんな緊急事態なのに……！

行けないなんて……！！！！

ディーンは夏美を再び眠らせさつきとは別の寝室に連れて行った。

第8夜。ディーンに捕らわれた夏美。そして夏美の夢と明かされる過去？完。

夏美「第9夜。夏美ディーンの魔の手から無事に脱出？そして・・・
再びヘルシングの緊急任務へ！？（前編）」「次章もどうぞ宜しく
！！」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第9夜。夏美ディーンの魔の手から無事に脱出？そして・・・再びヘルシングの

今章は、多分前後篇に訳させて書かせて頂く予定です。

ライカが、声、で出演予定です。長丁場の編集可能性ありで・・・。

サブタイトルちょっと変えました。

ひよっとしたら残酷シーン等あります。

第9夜。夏美ディーンの魔の手から無事に脱出？そして・・・再びヘルシングの

アレから再びまたディーンの手により眠らされた夏美。

そして・・・。

聞こえる馴染み兼相棒の声。

「夏美（相棒）」！！・・・しっかりしろ！！！！！！

眼覚めてくれ！！！！お前さんは此れでやられる奴じゃないだろう！！！！？

頼む！！！！！！戻って来てくれ！！！！！！！！！！ワカバとそしてヘルシングの為に！！！！！！！！頼むから！！！！！！！！！！頼むから！！！！！！！！

夏美はその相棒の悲痛な願いに目が覚める。

そして夏美「・・・相棒」！！今行くから！！何としても行くから待っている！！！！」

そしてディーンが居ない事を確認し脱出を試みる。

夏美はドアの所に行き開けようとしたがびくともしなかった。

夏美「・・・チィ！！！！鍵がかかってらー！！」

するとカッーンカッーンと音がした。

夏美すぐさま透視した。

夏美「！！！！！！！！」

ヤバい！！！！ディーンさんが来る！！

クソッ！！！！！！！！！！こうなったら一か八かだ！！

透視しながらギンガを構えそして腕を狙う。

そして……。引き金を引き銃弾が放たれた。

と同時にディーンの左腕に銃弾がかすり血が滴れる。

ディーンは其れを見て慌てずにそしてまるで楽しむかの様に「…面白い。」と呟いた。

夏美再びチィと軽く舌打ちをし「…かすった程度か。」すると窓を割り寝室から出て行って

愛車の所に行きすばやく乗り込みワカバ港を目指して走りさって行った。

ディーンは其れを見てニヤリと笑い「……今回はかりは大人しく退いてやろう。だが、今度会った時はそうはいかんぞ？橘家本家

の小娘。」

玲と同じく私の所へと墮としてやろう。

すると玲が来て「・・・血。出ているよ。大丈夫？ディーン？」

ディーン玲を見て「ああ。此れくらい平気だ。だがな・・・私は基本的に銀の銃弾はきかん。まア・・・

あれは‘特殊’そうだからな。」そう言い「行くぞ。玲。」

玲頷きディーンの後を追いついてリビングへと行った。

そしてリビングに着いた椅子に座りディーンは夏美を再び透視（見て）いた。

玲はディーンの足にそつとすり寄って来た。

一方、夏美はアレからワカバ港に到着していた。

ベルナドット「ああアア！！！！クソオオ！！！！やってもやっても
わんさか出てきやがる！！！！」

そう言い銀の銃弾をお見舞いして行った。

と同時に1人の人工グールがベルナドットに飛びついて来た。

するとその人工グールは突然燃えて行った。

ベルナドット驚いて「こ、こいつは火炎風拳火炎風火葬龍波！！！」
と同時に「夏の嬢ちゃんか！！？」

夏美申し訳なさそうに笑い「．．すみません！てこづりました。ベルの旦那。大丈夫ですか！？」

ベルナドット「たあく。遅せえつつの！！！」と笑いながら返した。

夏美は苦笑いをしつつも一息ついた。

と同時にドイツの第三部隊と人工グール達を夏美は睨みつけ「．．．
良くもうちの管轄内で大暴れしてくれたね！！私じゃアが相手してやるよ！！！！」

そう言い一気に殺気が出た「このワカバのリーダー兼幹部そしてヘルシング日本支部の橘夏美がな！！！！」

ドイツ第三部隊は其れを見て一気にこわばり体が動かなくなった。

それも人工グール達もそうだった。

アーカード其れを見てニヤリと笑い「ほう。」

そしてドイツ第三部隊の一員が「えエエい！！！！何をしている！！！！相手はたかが‘人間の小娘’だ！！退くな！！我々の偉大な少佐殿に勝利の報告を何としてもするのだアア！！！！かかれエ！！！！」

一気にドイツの第三部隊の連中が夏美に突進してきた。

夏美「……………愚かな奴ら、私しやアの炎の中で眠るがいいさ！！！！」

そう言い夏美は一気にドイツの第三部隊の連中を燃やして行った。

ベルナドット其れを見て「すげえな。」とあぜんとしていた。

セラス「やっぱり夏美さんは、色々な意味、で凄いですね。」

アーカードは其れを見てニヤリと楽しそうに笑った。

夏美は只其れを見て黙ってタバコに火を灯した。

一方、人工グールも夏美に一斉に襲いかかって行った。

だが、夏美はタバコの煙を吐き出し懷からギンガを取り出し一気に人工グール達に銀の銃弾を放ち続けた。

そして頭と心臓にぶち込んだ。

と同時に血飛沫が舞う。そして、夏美の頬に返り血いつの間にかついていた。

そして、チップが現れた。

夏美はセラスを見て「・・・悪いが、回収してくれ。」

セラス頷きチップの回収を始めた。

辺りはもうすっかりドイツ第三部隊の連中も人工グールの連中も（今の所はひとまず）

夏美は無言のままタバコを吸っていた。

そして夏美を見たセラスが「夏美さん。すべてチップを回収し終わりました。」

夏美「・・・了解した。」と続け様に「この後どうする?。」

セラス「ひとまず戻ります。」

夏美頷き「あいよ。」

そう言いタバコを口に加え直して愛車の方にゆっくり歩き始めた。

と同時に夏美は手の甲で頬についた返り血を拭い鼻の所に持って行った。

「・・・血臭い。」

‘この匂いはやはり嫌いだ。’

‘過去の傷をえぐり出す’。

そう心の中で呟き愛車へと乗り込んでひとまずワカバ兼ヘルシング
日本支部のアジトに戻って行った。

ディーンに透視（見られ続けられているとも）知らずに・・・。

第9夜。夏美ディーンの魔の手から無事に脱出？そして・・・再び
ヘルシングの緊急任務へ！？完。

第9夜。夏美ディーンの魔の手から無事に脱出？そして・・・再びヘルシングの

今章も無事に更新完了致しました。

って・・・ライカは声しか出ませんでしたね（笑；；）

すみません。（汗）

其れではほぼ毎回のグタグタの予告風をどうぞ（笑）

アレから戻った夏美はシャワーを浴び血を落した。

夏美「・・・・・・・・・・。」

そしてシャワーから出て着替えて部屋のソファーにゴロンと寝っ転がった。

すると、まがまがしい気配が、夏美の部屋を包み込んだ。

夏美は起きあがりギンガを構えた。

するとクククと笑い「ひでエなア。夏美イ。久々の、再会、なのに
よオ。」

夏美「・・・・！！！！そっその声は！！！！？」

まさか!!?」

そう声の主の方に振り向くとタバコを吸っていた高杉がニヤリと笑い

「よオ。俺の黒猫ちゃんよオ。」

夏美「・・・晋助様。」

夏美「第10夜。夏美久々に高杉との再会!?。」「次章もどうぞ宜しくね。」以上です。其れでは、次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第10夜。夏美、高杉との再会！？。（前書き）

今章は、夏美がアジトに戻り高杉さんと再会予定です。

長丁場もしくは編集可能性があります。

第10夜。夏美、高杉との再会！？。

アレから戻った夏美はシャワーを浴び血を落した。

夏美「・・・・・・・・・・。」

そしてシャワーから出て着替えて部屋のソファーにゴロンと寝っ転がった。

すると、まがまがしい気配が、夏美の部屋を包み込んだ。

夏美は起きあがりギンガを構えた。

するとクククと笑い「ひでエなア。夏美イ。久々の、再会、なのによオ。」

夏美「・・・・！！！！そっその声は！！！！？」

まさか！！！？

そう声の主の方に振り向くとタバコを吸っていた高杉がニヤリと笑い

「よオ。俺の黒猫ちゃんよオ。」

夏美「・・・晋助様。」

あア・・・。。まだ、再会しなかったのに。

どうして時間はこつも残酷なのだろう。

どうしてこうなってしまったのだろうか？

今はまだそつとしておいて欲しかったのに。

夏美はアレから、無言のまま貫いていた。

すると高杉が楽しそうに夏美に近づいてきて頬をさすった。

夏美はまるで、過去を思い出したかのように、高杉の手を持ち頬をすりよせた。

まるで、猫のように。

高杉は其れを見て満足そうに笑って夏美を抱きしめソファーに座り夏美の頭を己の膝に乗せた。

と同時に「寝てろ。最近ろくに寝れてねエんだろ？俺アがまア・・日が昇る前まで、だが側にいてやるよ。」そう言い頭を撫でて夏美は眼を閉じた。

まるで安心したかのように。

高杉は夏美の頭を撫で続けていた。

そして「・・・楓（母親）に少しだけだが似て来たなア。」とぼそつと言った。

と同時に夏美の首筋に顔をうずめ舐めて「・・・悪イなア。」そう言い牙を立てて夏美の血を少量だが吸った。

そして・・・。

高杉は自分の指を切り血を出し夏美の首に自分の血で蝶の紋章を描いた。

その紋章が夏美自身の体にしみわたった。

と同時に窓を見て「……そろそろ、日が昇るな。」そして夏美の頬に軽くキスをし「……またなア。」

そう言い去って行った。

と同時に夏美は眼が覚めた。

高杉の香りが辺りを包み込む。

夏美首元をさすりながら「……晋助様の香りが残ってる。」そして首に手をやり血を補給し、序に

冷蔵庫に行き血を製作する鉄分ドリンクを取り出して飲み始めた。

と同時にタバコに火を灯し「……香残すなんてあんまりだよ」。晋助様。また、会いたくなっちゃうじゃないの。」と小声で呟いた。

そしてテーブルに置いてあった鏡を見て「・・・!!!!」

そこには高杉が己の血で描いた蝶の紋章があった。

夏美「・・・ハハ。もうこれで「逃げられネエ」ってか。」と苦笑いをした。

「どこまで独占力が強いんだろうね。」
「私しやアのもう一人のご主人様（晋助様）は」。

と心の中で呟いてた。

第10夜。夏美、高杉との再会!?!。完。

第10夜。夏美、高杉との再会！？。（後書き）

今章も無事に更新完了致しました。

お付き合い下さいましてありがとうございます。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑）

此処は、香煉館の管轄しているホテルの傘下のホテル。

（表では公表していない（日本では））

12階の部屋で一人の男が窓を見ていた。

黒髪で黒のTシャツに黒のスーツそして黒のデニム。そして黒の靴。

で左腕には黒の龍の刺青が施されていた。

そう、この男は香煉館の館主である黒龍。

黒龍「・・・此処に俺の相棒が。^{パートナー}待っている。炎龍。」

そしてこの男は夏美が隼人の後を継いだって事を知っている。

次世代炎龍って事も。

其れは再び夏美に、危機をもたらす前兆、にすぎなかった。

黒龍「第11夜。香煉館始動？そして、日本吸血鬼界本格的迎え撃つ？」

「次章もどうぞよろしく。」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第11夜。遂に香煉館始動？そして、日本吸血鬼界本格的迎え撃つ？（前書き）

少々サブタイトルを変更しました。

今章は、オリの香煉館が出てくる予定です。

長丁場のもしかしたら編集可能性あります。

後半にもしかしたらまた高杉さん方が出てくる可能性があります。

多少微裏？等ある予定ですので苦手な方はお引き取り下さいます様
お願い致します。

第11夜。遂に香煉館始動？そして、日本吸血鬼界本格的迎え撃つ？

此処は、香煉館の管轄しているホテルの傘下のホテル。

（表では公表していない（日本では））

12階の部屋で1人の男が窓を見ていた。

黒髪で黒のTシャツに黒のスーツそして黒のデニム。そして黒の靴。

で左腕には黒の龍の刺青が施されていた。

そう、この男は香煉館の館主である黒龍。

黒龍「・・・此処に俺の相棒^{パートナー}が。待っている。炎龍。」

そしてこの男は夏美が隼人の後を継いだって事を知っている。

次世代炎龍って事も。

其れは再び夏美に、危機をもたらす前兆、にすぎなかった。

一方、その香煉館の管轄している傘下のホテルの外ではライカが隠れながらではあるが12階を見ていた。

と同時に黒龍の姿を確認するとタバコに火を灯し「……やつぱ来ていたか」。

面倒な事になったもんだ。只えさえ、夏美（相棒）は他の吸血鬼共に「狙われているッてエ」のによ。

まア……高杉様（あの方）が色々と対策して下さったみたいだし問題ねエか。

すると背後から音がした。

ライカ気配を察知したのか急いで氷棒を出す「何者かに先を越さ

れた、背後には拳銃を突きつけられていた。

すると男の声でクツと笑い「・・・おっと、動くんじゃアねエぜ？」

ライカはその声に聞きおぼえがあった。

そして「・・・ジンか？」

ジンククと笑い「・・・『ご名答』。俺だ。」

ライカフツと笑い「安心しなよ。何もしねえよ。只・・・黒龍^{あいつ}の見張り見てエなもんをしに

来たからさ。だから・・・その物騒なもん（ベレッタ）しまつてくれねえか？私しやアはこんなとこでこたごた起こしたくねえからさ。」

ジンニヤリと笑いベレッタを懐にしまった。

と同時に「・・・何でお前さんが此処にいる？」

ジン「俺も、香煉館の大將がどんな奴か見に来たのさ。」

ライカタバコを吸いながら「・・・なるほど。」

そしてジンも「お前は？」

ライカ再びフツと笑い「・・・仕事よ」。

ジン「・・・なるほどな」。

するとライカの携帯が鳴って「悪いね。」

そして「・・・私です。ハイ。今の所、目立った動きは見せておりません。」ハイ。分かりました。

ひとまず引き上げます。其れでは。「そう言いピツと通話ボタンを押し、携帯をパタと閉じてポケットにしまった。

ライカ「悪いね。ジン。もうちょい話したかったんだが、上から戻って来いって言われたもんでね。」

ジンニヤリ「そうか。で？上ってエのはどっちだ？本職か？（ワカバ）それとも、副職か？（ヘルシング）」

ライカフツと笑い「・・・ご想像にお任せするよ。」と続け様に「じゃ、また。」そう言い戻って

行った。

1人その場に取り残されたジンはチラとホテルを見てそしてフツと笑い「・・・いるんだろう？」

新一？」と闇に声をかけた。

すると新一が苦笑いをして「あらら、ばれちゃった？ジン。」と現れてジンの側に寄って来た。

ジंकクと笑い新一の腕をつかみ「あア。ばればれだ。お前の
‘匂い’はすぐにわかるぜ？

だってよ、俺の血が入っているからなア。」と耳元で囁いた。

新一は嬉しそうに笑って「そろそろ。俺たちも行こう？」

ジンタバコに火を灯し「あア。そうだな。」そう言い新一と共に闇
へと消えて行った。

一方、ライカは支部長室に行きインテグラに先程の報告をしていた。

インテグラ葉巻を吸いながら「・・・なるほどな。まだ、目立った動きなしと。」

ライカ頷き「ハイ。インテグラ様。後は先程携帯でご報告させて頂いた通りです。」

インテグラ頷き「分かった。ご苦労だったな。ライカ。もう下がっていいぞ?」

ライカー礼をし支部長室を後に、自分の部屋に戻ろうとした。

だが「・・・ちよいと、夏美（相棒）の様子を見てくるか。」と呟き夏美の部屋に向かった。

一方、夏美は相変わらず高杉がつけた‘高杉の血の蝶の紋章’をじっと見ていた。

そして、触りながら「・・・晋助様。」と寂しそうに呟いていた。

と同時に首を横に振り「何、女女しくなっているんだ！！私しやアは！！！！」とそしてソファーに

座りタバコに火を灯した。

一方、高杉はというと椅子に座り相変わらず夏美の様子を見ていた。

傍らには山崎を膝元に置いていた。

山崎も夏美の様子を見ていてクスクスと笑い「そんなに恋しいなら、高杉さんの所に戻ってくればいいのに。」

高杉もその言葉を聞きククと笑い山崎の頭を相変わらず撫でながら「そうさせる為にあえてもう一つ

鎖、をつけたのさ。此れであいつはワカバやヘルシングや実家以外何処にも行けネエだろう。」

山崎も再びクスクス笑い「じゃア、高杉さん、前もってこうなる事予想していたんですか？」

高杉ニヤリと笑い「あア。寧ろ、あいつは、俺なしじゃア生きて行けネエよ。」

山崎高杉の膝元にすり寄って「そうですね。あの子はもう、貴方に

依存していますよ。高杉さん。」

其れを聞いた高杉は山崎を見てクククと笑い「お前もだろう？
退？」

山崎クスと笑い「えエ。そうですよ。俺もです。」

高杉其れを聞いて満足したのか山崎を抱き寄せてキスをした。

そして、キス後に高杉は山崎の首筋に口を持っていき舐めて牙を立てて血を吸い始めた。

するとノック音がして高杉が気づき山崎の首筋から口を離して「・・・誰だ？」

「高杉。俺だ。」と土方の声がした。

高杉確認し「入れ。」そう言いつて土方に入るように促した。

と同時に土方が高杉の部屋へと入って行った。

第11夜。香煉館始動？そして、日本吸血鬼界本格的迎え撃つ？完。

第11夜。遂に香煉館始動？そして、日本吸血鬼界本格的迎え撃つ？（後書き）

編集なしでしたね。（苦笑；；）

今章も御付き合いましたしまして有難うございました。

・・襲撃シーンなかったですね（苦笑；；）

すみません。当初は入れる予定でしたが・・・。

次章こそは入れる予定です。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑；）

アレから土方はヘルシングが追ってる香煉館の動きが気になったのか。

独自で調べていた。

其れを高杉に報告していた。

高杉「・・・そうかい。黒龍の奴がねエ。」

土方タバコに火を灯し「あア。此処日本にいる事は間違いないエ。」

高杉もタバコに火を灯し「で？奴の狙いは？」

土方タバコ吸いながら「恐らく夏美だろうよ。」

高杉其れを聞いて「・・・何だと？何で夏美が狙われなきゃアならねエ？」

土方「その理由は、夏美が次世代炎龍だって事よ。嘗ての夏美の婚約者だった男が炎龍だって事であいつがそれを受け継いだのよ。」

元々、奴のパートナーでもあったからな。」

高杉ククと笑い山崎を見て「夏美は、こいつと同じ俺アのものだ。ワカバの奴ら以外には、絶対に渡さねエよ。」とタバコを吸いながら言った。

一方、夏美はライカから黒龍が日本入りしている事を伝えてた。

夏美は其れを聞いて只驚きを隠さないでいた。

土方「第12章。夏美に再び危機？そして黒龍の影？と同時に高杉達も動く？」「次章もどうぞよろしくな。」

第12夜。夏美に再び危機？そして黒龍の影？と同時に高杉達も動く？（前書き

今章は前半は高杉さん達が出て・・・。

後半はまたワカバコンビが出てくる予定です。もしかしたらまた長丁場の編集可能性があります。

第12夜。夏美に再び危機？そして黒龍の影？と同時に高杉達も動く？

アレから土方はヘルシングが追ってる香煉館の動きが気になったのか。

独自で調べていた。

其れを高杉に報告していた。

高杉「・・・そうかい。黒龍の奴がねエ。」

土方タバコに火を灯し「あア。此処日本にいる事は間違いないエ。」

高杉もタバコに火を灯し「で？奴の狙いは？」

土方タバコ吸いながら「恐らく夏美あいつだろうよ。」

高杉其れを聞いて「・・・何だと？何で夏美あいつが狙われなきゃアならね

エ？」

土方「その理由は、夏美^{あいつ}が次世代炎龍だって事よ。嘗ての夏美^{あいつ}の婚約者だった男が炎龍だって事であいつがそれを受け継いだのよ。

元々、奴のパートナーでもあったからな。」

高杉ククと笑い山崎を見て「夏美^{あいつ}は、こいつと同じ俺アのもの、だ。ワカバの奴ら以外には、絶対に渡さねエ、よ。」とタバコを吸いながら言った。

一方、夏美はライカから黒龍が日本入りしている事を伝えてた。

夏美は其れを聞いて只驚きを隠さないでいた。

そして、夏美は頭を抱えながらソファーに座りこんでいた。

ライカはその様子を見て「・・・夏美。」と呟いていた。

と同時に夏美の側に寄って来て肩をポンと叩きながら「大丈夫か？相棒？」

夏美苦笑いをしながら何時もの様にタバコに火を灯しながら「ああ。大丈夫だ。すまねエな。相棒。」

色々と心配かけちまった。」

ライカフツと笑いながらタバコに火を灯しつつ「・・・其れはおあいこ様よ。私しやアだってお前さんに
時をり心配ばかりかけさせているんだ。其れに・・・相棒の前に馴染み同士でもあるからな。私しやア達はさ。」

夏美フツと笑い「・・・そうだったな。」

そう・・・。

ライカ（こいつ）と夏美（私しゃア）は馴染み同士。

お互いに‘表と’、‘闇’を行き気しながら生きてきた。

だから・・・。

信じる事が出来る。

こいつは・・・。

大丈夫。

と心底思っ私しゃアが居る。

すると、緊急事態警報が鳴った。

そしてセラスが現れ「夏美さん！！ライカさん！！！！香煉館です！！！！」

夏美とライカは軽く舌打ちして互いに顔見合せ頷きいた。

そして雷外も慌てて「夏美の姉御ツ！！ライカの姉御ツ！！！！こ、黒龍の野郎もいるウ！！！！！！」

夏美其れを聞いて驚いて固まった。

ライカ再び舌打ちをし「雷外！！！！」

雷外「あいよ！！！！！！！」

ライカタバコをもみ消し再び火を灯しながら「兄様にいさまにご報告だ！！
急げッ！！！！」

雷外頷き「了解！！」

そしてセラスが第三の眼を使い探し始めた。黒龍を。

すると玄関の所に香煉館の連中を連れてその前に黒龍がいた。

セラス夏美達を見て「夏美さん！！ライカさん！！！！黒龍は部下を連れて玄関の所にいます！！！！」

夏美達も戦闘態勢になり「OK！！」

そして、夏美はライカを見て「さて、行きますか？『相棒』」

ライカもフツと笑い「あア。行こうか。『相棒』」

そう言い夏美の部屋を後にした。

と同時にセラスもフツと笑い「・・・いろんな意味で困ったお2人さん、ですね。」

そう言いハルコソネを担いで「さて、私も行きますか。」

「闘争の場所へと」

セラスの深紅色の瞳が「狂気」に満ち溢れてニヤリと笑っていた。

一方、其れを見ていたものが居た。

高杉と山崎と土方だった。

高杉タバコを吸いながらクククと笑い「アーカードの奴、とんでもねエ獣、を飼ってやがるなア。」

土方タバコを吸いながら「高杉。この小娘、元人間だ。」

土方から其れを聞いた高杉は再びクククと笑い「そうかい。」

すると山崎が「で？この後どうするんです？高杉さん？土方さん？このまま見て黙っている俺達じゃア

ないでしょう？」

高杉其れを聞いて「クククハハハハ！何だア？退？お前エも、暴れたくなっただのかア（遊び）」？」

退「え、えエ。其れもありますが・・何より。‘部外者である香煉館’（奴ら）が‘俺たちの管轄内’で好き勝手されるのが迷惑なだけなんですよ。」と続け様に「それに、香煉館の黒龍の奴は夏美さんの事自分のものだつて思いこんでいるみたいだし・・此処はつてね。」と若干不機嫌そうな顔で言つた。

彼女は（夏美さん）は高杉さんのものなのに。

高杉タバコ吸いながらニヤリと笑いながら「確かになア。そうだなア。あの‘小僧（黒龍）’には‘あいつ（夏美）’が誰のものか分からせねエといけねエからなア。」

と続け様に土方を見て「・・‘うちの連中共とお前ん所の連中に声かける。’俺達も行くぜ？」

土方其れを聞いてニヤリと笑い「了解した！」そう言い高杉の部屋を後にした。

高杉はニヤリと笑い「さアて、そろそろ俺達も準備するかねエ、楽しい祭りのなア」。

俺達の管轄内で暴れる何ぞアそれなりの覚悟はちゃんと出来ているんだろうなア？

香煉館の小僧め。

山崎も嬉しそうに高杉の所に再び寄って行った。

第12夜。夏美に再び危機？そして黒龍の影？と同時に高杉達も動く？完。

第12夜。夏美に再び危機？そして黒龍の影？と同時に高杉達も動く？（後書き

今章も無事に更新完了致しました。お付き合い下さり有難うございます。

其れでは毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑）

香港の管轄する香煉館の突然の襲撃を受けたワカバそしてヘルシング日本支部。

そして……。

黒龍「……ついに見つけた。俺の相棒」パートナー」

そして「炎龍。いや……夏美」シャアアメイ」

その事を聞いた夏美は「……ッ！……！……！その中国名の発音で私しやアを

私しやアを……。」

「^{シャアアメイ}夏美、私のかわいい妹分、」

夏美、凄い形相でギンガを黒龍に向けて「呼ぶんじゃアアアねえエエ
！！！！！！」と叫びながら撃ち始めた。

ライカ「夏美ッ！！！！！！」

クソ！！！！あいつは（黒龍）は多分知らねエんだ！！！！あいつが何
故「シャアアメイ」と呼ばれるのが嫌いなわけを・・・。

すると黒龍の前に一人の少女がたった。

夏美「どけッ！！！！！！小娘！！！！今の私シャアは、機嫌が少々悪
い！！！！」

するとその少女は両手を握りしめながら「・・・黒龍様を、いじめ
ちゃア・・・」

ライカハツとして「ヤバい！！避ける相棒！！！」

夏美「え？」

少女「駄目EEEEEE！！！！！！！！！！」と泣き叫んだ。

すると地面が行き成りもってそして剣の様になって「黒龍様をいじめらるなら

例え夏美様（シャアアメイ様）でも許さないもんツ！！！」

夏美「・・・クソ！！！」

この嬢ちゃん、地面使いか！？、

すると夏美「火炎風拳！！！！火炎風爆龍波！！！！」と攻撃を開始しただが。

少女は「残念。私の地面術はちょっと特殊だね。夏美様の「炎と雷」は通用しないよ。後、他の4代風拳のもね。」とクスクス笑った。

そして指でクイとやり地面の剣を夏美に向けて「・・・ちょっとお痛しないと分からないみたいだから。」黒龍様には悪いけどちょっとやらせてもらうね。」そう言い夏美に向けて振り下ろした。

夏美「チィ！！！」そう言いギンガを連射した。

だが通用しなかった。

夏美

クソ！！！！なんてこった！！！！

此处までかい！？

少女「黒龍様の言う事聞かないからいけないんだよ？」

と言った。

次の瞬間ドシュッ！！！！と突き刺さる音がした。

そしてワカバには「夏さアアアん！！リーダーアアア！！！！相棒オオ！！！！」

とさまざまな夏美を呼ぶ声がした。

だが、夏美は無傷だった。

すると「たああくよオ。何あきらめてんだア？お前エらしくねエじやアねエか。夏美。」

左腕から血が滴れた。

夏美は恐る恐る眼を開け自分の前にいる人物に驚いた。

そして・・

「ひつ、土方の兄貴！？」

土方ニヤリと笑い「よオ。夏美イでかくなつたじゃねエか」

と同時に地面の剣を左手から抜き取りながら耳元でククク「この傷の借り」は「ちゃんと返してもらうからなア」「覚悟しておけよ？」と囁き呟いた。

夏美顔真っ赤にした。

と同時に心の中で。

兄貴と晋助様性格が似ているすぎると思うのは私しやアだけかアア
！？

ってか絶対に一緒だよ！！！！瞳孔もある程度開きかかっているし
さー！！

すると土方ニヤリと笑い「何だ？ そんなに高杉の奴も呼んでほしいのか？」

夏美冷や汗だくだくだった（笑）

夏美「だ、第13夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・・そして高杉と土方助っ人で登場！？（前編）」

「じ、次章もどうぞ宜しくね！！！」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第13夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・・そ

此方もお久しぶりでしょうか。

今章は残酷シーン等ある予定です。

長丁場の編集可能性もあります。前後篇でお届けする予定です。

第13夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・・そ

香港の管轄する香煉館の突然の襲撃を受けたワカバそしてヘルシング日本支部。

そして・・・。

黒龍「・・・ついに見つけた」。
「俺の相棒」^{パートナー}」

そして「炎龍。いや・・・夏美」^{シャアアメイ}」

その事を聞いた夏美は「・・・ッ！！！！その中国名の発音で私し
やアを

私しやアを・・・。」

「夏美」^{シャアアメイ}私のかわいい妹分」

夏美凄い形相でギンガを黒龍に向けて「呼ぶんじゃアアアねえエエ
!!!!!!!!!!」と叫びながら撃ち始めた。

ライカ「夏美ッ!!!!!!!!!!」

クソ!!!!!!!!あいつは（黒龍）は多分知らねエんだ!!!!!!!!あいつが何
故「シャアメイ」と呼ばれるのが嫌いなわけを・・・。

すると黒龍の前に一人の少女がたった。

夏美「どけッ!!!!!!!!!!小娘!!!!!!!!今の私シャアは「機嫌が少々悪
い!!!!!!!!!!」

するとその少女は両手を握りしめながら「・・・黒龍様を、いじめ
ちゃア・・・。」

ライカハツとして「ヤバい!!!!!!!!避ける相棒!!!!!!!!!!」

夏美「え?」

少女「駄目EEEEEE!!!!!!」と泣き叫んだ。

すると地面が行き成りもってそして剣の様になって「黒龍様をいじめるなら

例えば夏美様（シャアアメイ様）でも許さないもんッ!!!!」

夏美「・・・クソ!!!!」

この嬢ちゃん、地面使いか!？」

すると夏美「火炎風拳!!!!火炎風爆龍波!!!!」と攻撃を開始したが。

少女は「残念。私の地面術はちょっと特殊だね。夏美様の「炎と雷」は通用しないよ。後、他の4代風拳のもね。」とクスクス笑った。そして指でクイとやり地面の剣を夏美に向けて「・・・ちょっとお痛くないと分からないみたいだから。」黒龍様には悪いけどちょっとやらせてもらうね。」そう言い夏美に向けて振り下ろした。

夏美「チィ!!!!」そう言いギンガを連射した。

だが通用しなかった。

夏美

クソ！！なんてこった！！！！

此処までかい！？

少女「黒龍様の言う事聞かないからいけないんだよ？」

と言った。

次の瞬間ドシュッ！！！！と突き刺さる音がした。

そしてワカバには「夏さアアアん！！リーダーアアア！！！！相棒オオ！！！！」

とさまざまな夏美を呼ぶ声がした。

だが、夏美は無傷だった。

すると「たああくよオ。何あきらめてんだア？お前エらしくねエじやアねエか。夏美。」

左腕から血が滴れた。

夏美は恐る恐る眼を開け自分の前にいる人物に驚いた。

そして・・

「ひつ、土方の兄貴！？」

土方ニヤリと笑い「よオ。夏美イでかくなつたじゃねエか」

と同時に地面の剣を左手から抜き取りながら耳元でククク「この傷の借り」は「ちゃんと返してもらうからなア」「覚悟しておけよ？」「と囁き呟いた。

夏美顔真っ赤にした。

と同時に心の中で。

兄貴と晋助様性格が似ているすぎると思うのは私しゃアだけかアア
！？

つてか絶対に一緒だよ！！！！瞳孔もある程度開きかかっているしさ！！

すると土方ニヤリと笑い「何だ？『そんなに高杉の奴も呼んでほしいのか？』」

夏美冷や汗だくだだった（笑）

土方ニヤリと笑い「もちろん。俺だけじゃアねエんだぜエ？此処にいるのはよオ。」

すると「十四郎様アア！！！！夏美様アア！！！！」ご無事っ
スカアアア！！！！？」

ライカ「ん？あの声・・・」

そして、夏美も心の中でまさか！？

と高杉の手下である‘紅い弾丸’の異名を持つ来島また子が現れた。

。ちなみに彼女は人間である。何故高杉の所にいるかは今の所不明・

土方ニヤリと笑い「よオ。また子。大丈夫だ。」

また子はホッとしたが・・・土方の腕を見て血が滴れた。

すると腰の所からのホルダーから二丁拳銃を取り出し「誰だアアア
！！！！！！十四郎様に傷をつけた奴はアアア！！！！！！！！晋助様
と十四郎様に傷をつける奴はこの来島また子が断じて許さないっス

「！！！！」

と続け様に「さア！！出てくるッス！！！！」

するとライカが「あ、あのさ・・・来島ちゃん。」

また子その声を聞いて「あ、ライカ様！！お久しぶりッス！！お元気そうだなによりッス！！」

ライカ「あア・・・久しぶり。って・・・ひとつ聞いて良いかな？もしかして・・・高杉様も見えてる？」

また子頷いた。

と同時に夏美を見て苦笑いをしながら「・・・だよ。相棒。」

夏美は其れを聞いて頭を抱えながらそのままうなだれていた。

と同時にライカ「・・・あア、因みに来島ちゃん。土方様はね夏美を庇って下さったんだよ。ホレ・・・」

言いくいんだが、黒龍の側にしがみついているこの嬢ちゃんがそうだ。」

とライカは黒龍の側でしがみついている少女を見た。

少女の名は藍明アイミン小さな黒のチャイナドレスを着ている。

ちなみに彼女も人間で・・・香港で1人途方に暮れた所を黒龍に拾われる。

また子は其れを見て「ん、んな！！こ、こんな子供^{ガキ}つか！？」

ライカ頷きながら苦笑いをし「信じられねえだろうが・・・そんなんだなア。」と言った。

するとまた子が「いくら、子供^{ガキ}でも十四郎様方を襲うなんて絶対に許せないッス！！！」

そう言いながら藍明に銃口を向ける。

藍明「・・・私、悪くないもん！！黒龍様をいじめようとしたからそして言う事聞こうとしなかったから

やったんだもん！！」

すると後ろから「いけませんよ。また子さん。子供には優しくしないと。。。」

また子その声を聞きゲツ顔を引きつり「・・・何でアンタもいるんつか！？武市変態！！！」

すると「変態じゃない。フェミニストです。」と武市変平太が現れた。

武市「ってか・・・先輩をつける！！このヤロウー！！」

土方クククと笑い「相変わらずだなア。お前等。」

するとアーカードが土方の所に来て「久しいな。土方。で？何故お

前達が此処にいる？」

土方タバコに火を灯し「よオ。アーカード。いや、此処は日本で此処も一応俺等の管轄内だからな。

よそ様（香港）の連中に好き勝手させるわけにはいかねエと思つてなア。」と続け様に「其れに・・・。

夏美こいつに手を出されてちよいとうちの所の大將（高杉）が大方機嫌悪くなつちまっているからなア。」とクククと笑いながら夏美を見て言った。

アーカードもニヤリと笑い「・・・なるほど。」

すると夏美ははア・・・と軽くため息をつき黒龍を見て「・・・黒龍。アンタ・・・私じゃア」じゃなく、

本当は「彼が」良かったんじゃないの？」と言った。

夏美が言った、彼とは、？

第13夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃
され・・・そして高杉と土方助っ人で登場！？（前編）完。

第13夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・・そ

今章も無事に更新完了しました。

今章も御付き合いました。有難うございます。

さて、其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑）

アレから香煉館の連中に襲撃を受けたワカバとそしてヘルシング日本支部。

そして土方達が登場しそして夏美は、自分を欲しがっている黒龍に
対して

「私じゃアじゃなくて、本当は、彼が、良かったんじゃないの
？」

と言った。その彼とは・・・そう今は亡き夏美の恋人兼婚約者だった
隼人だった。嘗ての炎龍と呼ばれ黒龍の一時のパートナーだった。

すると黒龍は「・・・確かに、俺は、彼が良かった、だが、今はも
う、彼はいない、だが、俺はお前も好きだ。」

夏美「・・・ごめん。私じゃアは、お前さんが嫌いだ。どうも好きに
なれん、」

私しゃアは、ワカバとヘルシングに、仕え続けるだけだ！！！そして……

昔も今も……私しゃアの、もう一つの居場所は、」

すると背後から「夏美。」と呼ぶ声がした。

其処には高杉が居た。

高杉が山崎を引き連れてククと笑い「今も昔もお前のもう一つの居場所は

俺アの所だ。」「そうだろオ？」

夏美は其れを聞いて「……晋助様。」

そうだね。私しゃアは。

今もそしてあの頃も晋助様の所が私のもうひとつの場所だった。

と続け様に黒龍を見て「……だから、悪いがアンタの所には行けない。」

すると其れを聞いた黒龍はフツと笑い「致し方ねエな。」と言
い藍明を見て「藍明。」

藍明頷きオウガの所を見た。

夏美ハツとして・・。

まさか!?

と同時に「兄様ッ!!!お、お逃げ下さい!!!!!!」と叫んだ。

すると藍明クスと笑い「・・『もう遅いよ』。」

そう言い足をダンとしてオウガめがけて地面の槍を襲わせた。

夏美物凄い形相でオウガの所へと走って行った。

間に合え!!!!!!間に会ってくれ!!!!!!

もう嫌なんだ!!!!!!此れ以上『失うのは』!!!!!!

そして・・・。

ドシュ！・・・と貫き音がした。

と同時に「なッ！・・・！夏美イイ！・・・！！！！！！！！」とオウガの叫び声が聞こえた。

其処には右肩を貫ぬかれた夏美がオウガを庇って立っていた。

夏美「第14夜。第13夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・・そして高杉と土方助っ人で登場！？（後編）」

「次章もどうぞ宜しく！！」

以上です。今章も御付き合いました。ありがとうございました。

第14夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・・そ

今章は前章と続きです。

長丁場のもしかしたら此方も編集可能性あります。

残酷シーン等も付く予定です。

予めご了承ください。

第14夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・・そ

アレから香煉館の連中に襲撃を受けたワカバとそしてヘルシング日本支部。

そして土方達が登場しそして夏美は、自分を欲しがっている黒龍に対して

「私しやアじゃなくて、本当は、彼が、良かったんじゃないの？」

と言った。その彼とは・・・そう今は亡き夏美の恋人兼婚約者だった隼人だった。嘗ての炎龍と呼ばれ黒龍の一時のパートナーだった。

すると黒龍は「・・・確かに、俺は、彼が良かった、だが、今はもう、彼はいない、だが、俺はお前も好きだ」。

夏美「・・・ごめん。私しやアは、お前さんが嫌いだ。どうも好きになれん」

私しやアは「ワカバとヘルシングに、仕え続けるだけだ!!!そして・・・」

昔も今も・・・私しやアの、もう一つの居場所は、」

すると背後から「夏美。」と呼ぶ声がした。

其処には高杉が居た。

高杉が山崎を引き連れてククと笑い「今も昔もお前のもう一つの居場所

俺アの所だ。」「そうだろオ?」

夏美は其れを聞いて「・・・晋助様。」

そうだね。私じゃアは。

今もそしてあの頃も晋助様の所が私のもうひとつの場所だった。

と続け様に黒龍を見て「・・・だから、悪いがアンタの所には行けない。」

すると其れを聞いた黒龍はフツと笑い「致し方ねエな。」そう言い藍明を見て「藍明。」

藍明頷きオウガの所を見た。

夏美ハツとして・・。

まさか！？

と同時に「兄様ッ！！！！お、お逃げ下さい！！！！！！」と叫んだ。

すると藍明クスと笑い「・・『もう遅いよ』。」

そう言い足をダンとしてオウガめがけて地面の槍を襲わせた。

夏美物凄い形相でオウガの所へと走って行った。

間に合え！！！！間に合ってくれ！！！！！！！！

もう嫌なんだ！！！！此れ以上『失うのは』！！！！

そして・・。

ドシュ！！！！と貫き音がした。

と同時に「なッ……！夏美イイイ……！！！！！！！！！！」とオウガの叫び声が聞こえた。

其処には右肩を貫ぬかれた夏美がオウガを庇って立っていた。

夏美ガクと片膝をついた。

と同時にワカバの面々も「オウガ様ア……！（ボス……！！）（兄様^{にいさま}）……！！夏美……！！姉御……！！

リーダー……！！」とオウガ達の所に群がって来てライフエイ「オウガ……！！夏美……！！大丈夫か……！！」

夏美ニヤリと笑い「あ、あア……大丈夫だ。それよりライフエイ！相棒達……！！兄様を安全な場所に……！！」

オウガ「し、しかし……お前は？」

夏美右肩を抑えつつも「わ、私は此处で時間稼ぎを致します!!」

すると亜理紗が「な、何言っているの!? あんた!? 正気!？」

そう言い夏美を連れて行こうとした次の瞬間オウガ「亜理紗!」

亜理紗は何かを感じたのか夏美の腕を離し「・・・死んじゃ駄目よ!!」
「ちゃんと生きて戻って来てよ!!」
「死んだら承知しないんだから!!!!」

夏美回復龍王波（名は特に意味なしです（笑・・・）回復する能力があると思って下さい）

を使い右肩の治療をした。

そして・・・。

夏美は一気に殺気を放った。

アーカード其れを見てニヤリと笑い「ほう。」

ライカも苦笑いをし「・・・やれやれ。『とんだごさんかな』？」

と同時に「・・・多分『炎龍化^{アレ}』になるな。」

そして夏美はギンガを構えながら「・・・小娘。『兄様を傷つけようとしたその代償』はちゃんと償ってもらうぞ？」

藍明はその夏美の姿を見て思いっきり引いていた。

と同時に小声で「ば、化け物。」

「人間の皮をかぶった化け物」と言った。

「人間の皮をかぶった化け物」

その言葉が夏美の脳裏に何故か知らないが「こびりついていた」。

夏美タバコに火を灯しながら「フ、フ……フハハハハ……!!」
人間の皮をかぶった化け物か。

良いじゃねエか！！今の私しゃアにはお似合いだよ、ハハハハハ！！！」と高笑いをしながら言った。

ライカ「夏美ツ！！！」と慌ててまるで、狂い笑いをした夏美の所にやって来て抱きつきながら、

「しっかりしろ！！！！相棒！！お前さんは、狂っちゃアいねエ、化け物でも何でもねエ只の人間なんだよ、リーダーであるお前さんがしっかりしないでどうすんだ！？あいつ（有理の下）に戻るんだろ！？

しっかりしろよ！！！！相棒！！！！」

夏美其れを聞いてフツと笑い我に返り「・・・有難うよ。相棒。いやな・・・昔炎龍時代の時にさ・・・

良く言われたんだよ。血に濡れた私しゃアを見て周りの人間が、人間の皮をかぶった化け物、もしくは

「悪魔。死神」ってな。」

ライカ驚いて「お前さん、何で今までその事言わなかったんだ？？」

夏美ギンガを再び用意しながらタバコに火を灯し「別に、良いんだよ。気にしていなかったからさ。」

其れに・・・お前さんも昔は「私しやアと似た様なもの言われただろっ」？同じ想いをして欲しくなかったのさ。其れに・・・。」

「傷つくのは私しやアだけで十分だ。」そう呟きながらライカに有難うよ。と軽くポンと肩をたたき礼を

言い再びギンガを香煉館そして・・・黒龍に向けけて。

「もう、長い長い追いかけてこも仕舞にしようや。」

と同時に「私しやアは、アンタらのほかにもう一つ、別に過去の鎖を立き斬らなきゃアならねエからな。」

藍明も黒龍の前に行き「……黒龍様は消させないもん!!!!!!」

すると高杉ククと笑い「……あの小娘、幼いころの夏美にそっくりだ。」と呟いた。

そして夏美は其れが聞こえたのか「……あの嬢ちゃんと同じ感じだったっけ？私しやアの幼いころって？

晋助様？」と苦笑いをして言った。

高杉ククと笑い「あア。」

夏美は首をかしげて「……もう少し、お天場だった気がするが」。

」と付け加えた。

するとセラスが「夏美さアア。とつとと終わらせて私に暴れさせて下さいよオ。」と駄々をこねる。

夏美タバコを吸いながら「まア・待てや。セラス。もうそろそろ仕舞にしてお前さんにバトンタッチしてやつからさ。」とニヤリ。

セラスは其れを聞いてとても嬉しそうに笑った。

ライカ其れを見てやれやれと笑いながら「流石は、アーカード様の従僕だね。」

闘争したくてうずうずしているんだな。

一方高杉達はその様子を楽しそうに見ていた。

第14夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃
され・・・そして高杉と土方助っ人で登場！？（後編）完。

第14夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・・そ

今章も無事に更新完了致しました。

今章も御付き合いくださいますと有難うございます。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑；）

夏美は、藍明と相変わらず対峙しつづけていた。

夏美タバコの煙を吐き出しながら心の中で・・・。

さて、どうするかね。この嬢ちゃんには私しやアの‘火炎風拳’が効かない。そして・・・‘雷風拳も’。ん？待てよ？ひよつとしたらアレなら・・・

通用するかも知れねエ！！チイと‘体力等’が半減する‘危険な賭け’だが一丁やってみつか。

藍明「ネエ・・・もう、‘終わりにしよう’。詰まなくなつて来ちゃった。

夏美様。黒龍様の邪魔するそして側にいてくれないなら・・・。」

「消えて？」

夏美タバコ吸いながら「・・・悪いが、‘消えるわけにも’いかなくなつちまつたんだ。私しやアにはまだまだやらなきゃならねエ事が

残っているんな。「そう言いながら「私しやアの専門が通用しなかったらこいつはどうよ！！？拳法変換術！！！！」」そう言い夏美は左腕の拳法刺青を3回たたいた。

ライカ其れを見て「・・・ま、まさか！！あいつ！？」

あれをやる気じゃア???!

そのあれとは？

ライカ「第15夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・・そして高杉と土方助っ人で登場！？（後編2）そして・・・遂に夏美と藍明決着なるか！？」「次章もどうぞ宜しくね！！！！」

以上です。此処まで読んでいただき本当にありがとうございます。次章もどうぞ宜しくお願い致します。

第15夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・・そ

今章も多分最終後編となる予定です。

前前章同様に長丁場の残酷シーン等あり予定の長丁場編集可能性が多分あります。

その辺もご理解とご了承のほどよろしくお願い致します。

第15夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・・そ

アレからずっと・・・。

夏美は、藍明と相変わらず対峙しつづけていた。

夏美タバコの煙を吐き出しながら心の中で・・・。

さて、どうするかね。この嬢ちゃんには私しやアの『火炎風拳』が効かない。そして・・・『雷風拳も』。ん？待てよ？ひよっとしたらアレなら・・・。

通用するかも知れねエ！！チィと『体力等』が半減する『危険な賭け』だが一丁やってみつか。

藍明「ネエ・・・もう、『終わりにしよう』。詰まなくなつて来ちゃった。

夏美様。黒龍様の邪魔するそして側にいてくれないなら・・・。」

「消えて？」

夏美タバコ吸いながら「・・・悪いが、『消えるわけにも』いかなくなつちまつたんだ。私しやアにはまだまだやらなきゃならねエ事が残っているんだ。」そう言いながら「私しやアの専門が通用しなかったらこいつはどうよ！！？拳法変換術！！！！」そう言い夏美は左腕の拳法刺青を3回たたいた。

ライカ其れを見て「・・・ま、まさか！！あいつ！？」

あれをやる気じゃア??！

そのあれとは？

夏美「水風波動龍王龍神拳！！！」

（上記の一応拳法です（オリジナルの）嘗ての夏美のメイランとは別姉貴分が使用していた拳法で

4代風拳はそれぞれ自分の所属している拳法とは別に異なる拳法を1、2個位もつ事を許されていると言っ設定です。因みにこの拳法も伝説の拳法と言っ設定でもありません。）

夏美「・・・行くよ！！！！雷と炎じゃだめなら水ならどうだい!？」

すると夏美は水風波動龍王龍神拳の刺青に手をやり心の中で・・・。

あずな姉さん。

三枝あずな。先代の水風波動龍王龍神拳の伝承者でありワカバと紅の女幹部の1人であり夏美の姉貴分だった女。だが、広州や香煉館の卑劣な罠により重傷を負い数年前にこの世を去った。

夏美構えて「黒龍!!! 特にお前さんならこの拳法見覚えあるだろう!!!?」

黒龍「こいつは、まさか・・・あの女の!?!?」

夏美「そうだ!!! 数年前・・・広州とそしてお前さん所の香煉館の卑劣な罠により重傷を負ってこの世を去った三枝あずなの拳法だ!!! それに・・・その女は私キミしゃアの姉貴分でもあり良き相棒（仲間）だったんだよ!!!」と。

其れを聞いた黒龍は驚いた。「・・・じゃ、あの時あの女がお前の名を呼んだのは・・・お前が妹分だったからか?」

「夏美。ちゃんと帰るって約束したのに帰れなくてごめんね」

夏美悔しそうに「あア・・・その通りだ！！私しやアはこいつでお前等香煉館をつぶしてやろうかと思ってなあ！まずは・・・お前エさんからだ藍明！！！！覚悟しな！！」

藍明も迎え撃とうと地面を再び踏んだ。

夏美

あずな姉さん。姉さんの拳法借りるね。

頼む。私しやアの体よ。持ってくれな。

ライカ「・・・相棒。」と心配そうに夏美を見つめる。

夏美フツと笑い「大丈夫さ。そんな顔するな。ちゃんと戻って来て
やつから。」と続け様に「あ、そうそう。私しやアが藍明とやりあ
っている最中に・・・人工グールの連中の掃除セラスと共に頼むわ
あ。」

ライカタバコに火を灯しフツと笑い「・・・了解した。」と氷棒を持
ち「・・・後でな。相棒。」

夏美「あア。」そして「行きますか!」

と藍明に向かって突進していった。

第15夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃
され・・・そして高杉と土方助っ人で登場!?(後編2)そして・・・
遂に夏美と藍明決着なるか!?完。

第15夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・・そ

今章も無事に更新完了致しました。

此処まで読んでいただきありがとうございます。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑）

藍明夏美に向かって「黒龍様の邪魔する！もう、いくら夏美様でも許さないもん！！いい加減くたばってもしくは黒龍様のものになつて！！」

夏美ニヤリと笑い「・・・お断りだね」！私しやアからすればこの男はもう一人の姉貴分の仇！！側に入れるわけないわ！！！！」

そう言い水風波動龍王龍神拳の技を繰り出す。

一方、セラスは香煉館の人工ゲール共をライカを初め日本吸血鬼界を率いる

高杉そして土方達と共に始末していた。

高杉チイと舌打ちしながら「来島ア！！！！撃てや！！」

また子「了解っス！！晋助様！」　そう言い銃弾を浴びせる。

セラスハルコネを持ちながら応戦し「ライカさん！！」

ライカ頷き氷棒で応戦した。

果たして蹴りはつくのか？

ライカ「第16夜。夏美VS藍明最終決着！？そして香煉館の人工
グールVSヘルシング&日本吸血鬼界！そして・・・香煉館に加勢
者登場！？」

「次章もどうぞよろしくな！」

以上です。次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第16夜。夏美VS藍明最終決着！？そして香煉館の人工ゲールVSヘルシング

今章も前々章同様に残酷シーン等ありの予定です。

長丁場の編集可能性あります。

第16夜。夏美VS藍明最終決着！？そして香煉館の人工ゲールVSヘルシング

藍明夏美に向かって「黒龍様の邪魔する！もう、いくら夏美様でも許さないもん！！いい加減くたばってもしくは黒龍様のものになつて！！」

夏美ニヤリと笑い「・・・お断りだね！私じゃアからすればこの男はもう一人の姉貴分の仇！！側に入れるわけないわ！！！」
そう言い水風波動龍王龍神拳の技を繰り出す。

一方、セラスは香煉館の人工ゲール共をライカを初め日本吸血鬼界を率いる

高杉そして土方達と共に始末していた。

高杉チイと舌打ちしながら「来島ア！！撃てや！」

また子「了解っス！！晋助様！」そう言い銃弾を浴びせる。

セラスハルコネを持ちながら応戦し「ライカさん！！」

ライカ頷き氷棒で応戦した。

ライカ「オラオラオラ！！さつさと散っちゃいなア、人工ゲール共オ！！！！」そう言いながら

氷棒を人工グールに突き刺して行った。

散って其処からチップが舞いあがるとライカは其れを器用に回収する。

一方、夏美は藍明と対峙していた。

互いに血飛沫が舞う。

藍明「・・・つう。」左ほほに夏美の攻撃が当たり痛みで顔をしかめる。

夏美

・・やれる！今度こそ大丈夫！

「こいつで御仕舞だア！！！！水風波動龍王龍神拳水風波動爆龍神拳
！！！！」

と大技を放った。

だが、これが夏美の体に大きな負担となる。

夏美の体にしびれが襲う。

だが・・・。

「夏美、」と嘗てのもう一人の姉貴分の顔が過って。

そうだ！！負けるわけにもいかねえんだ！！！！

私しやアの体よ！もってくれ！！頼む！！頼むから！！！

そして夏美「いっけエエエエ！！！」と叫んで技を藍明に喰らわせる。

そして藍明は其れをくらいその場で崩れるように倒れた。

黒龍其れを見て慌てて「藍明！！！」と藍明に駆け寄り「オイ！しっかりしろ！！大丈夫か！？」

「藍明半泣き状態で「……ごめんなさい。黒龍様。負けちゃった。」

黒龍微笑んで藍明の頭を撫で「ご苦労さん。お前は本当によくやってくれたよ。」

その事を聞いた藍明が頬笑みを返した。

すると、行き成りドカーンと爆発音がした。

夏美「……な、何だ……！」

するとライカがテレパシーで『相棒！！！来てくれ！！！大至急だ！！！！』

夏美「何があつた！？相棒！？」

ライカ『ど、ドイツのナチの連中が来た！！！！多分香煉館の連中の加勢だろうよ！！！！』

夏美其れを聞いて軽く舌打ちし「了解！！！！今行く！！！！」

夏美は一瞬体のしびれで動かなくなるが、冷静さを取り戻してすぐに黒龍達をチラとみて急いで再びライカの下に戻って行った。

夏美

頼む！！！！間にあってくれ！！！！

そう願いながら走り続けた。

別に相棒達が無事でいてくれるのであれば私じゃアはいくら傷ついてもかまわん。

そう思いながら走り続けた。

第16夜。夏美VS藍明最終決着！？そして香煉館の人工グールV

Sヘルシング&日本吸血鬼界！そして・・・香煉館に加勢者登場！
？完。

第16夜。夏美VS藍明最終決着！？そして香煉館の人工ゲールVSヘルシング

今章も無事に更新完了致しました。

今章も御付き合いました。ありがとうございます。

其れでは、ほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑）

アレから走り続けた夏美はライカ達（相棒）の気配を勘繰りながら場所へ

向かう。

そして夏美の前に現れたのが何とゲール達だった。

夏美「どけエエエエ！！！！！！！！！！」そう叫びながら己の拳法で

燃やし続けた。

と同時にまた走り出した。

そしてライカ達の所に無事にたどり着いた。

其処にはドイツのナチに傷つけられた相棒達の姿だった。

夏美其れを見てあまりにも怒りが狂いそして「てめエらアアア！！！！！！」
ゼツてエに許さねエエ！！！！」と続け様に「此処から只で帰れる
と思うなよ！！！！ナチの狗共！！！！」

と叫びながらそして殺気を莫大にして睨みつけた。

その姿を見たライカは傷だらけになりながらも「・・・あア。マジ
イな。こりゃア。『燃やされるぜ』多分全員な。」

高杉其れを見てクククと笑い「切れた夏美」は大変だからなア。

夏美イ

「壊してしまえやア」。

夏美「了解！晋助様！！」そして自分自身に熱気を惑わせナチの軍
隊に向かって歩き出した。

ライカ「第17夜。夏美VS藍明最終決着後。香煉館の加勢者であ
るナチ登場！そして相棒達を傷つけた夏美の怒りがナチを襲う！？」

「次章もどうぞよろしくな！」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第17夜。夏美VS藍明最終決着後。香煉館の加勢者であるナチ登場！そして相

今章は、前章と似た様な感じですよ。

長丁場の残酷シーン等あります。

第17夜。夏美VS藍明最終決着後。香煉館の加勢者であるナチ登場！そして相

アレから走り続けた夏美はライカ達（相棒）の気配を勘繰りながら場所へ

向かう。

そして夏美の前に現れたのが何とグループ達だった。

夏美「どけエエエエ！……！！！！！！！！！！」そう叫びながら己の拳法で

燃やし続けた。

と同時にまた走りだした。

そしてライカ達の所に無事にたどり着いた。

其処にはドイツのナチに傷つけられた相棒達の姿だった。

夏美其れを見てあまりにも怒りが狂いそして「てめエらアア!!!!!!」

「ゼツてエに許さねエエ！！！」と続け様に「此処から只で歸れる
と思うなよ！！！」ナチの狗共！！！」

と叫びながらそして殺気を莫大にして睨みつけた。

その姿を見たライカは傷だらけになりながらも「・・・ああ。マジイな。こりゃア。『燃やされるぜ』多分全員な。」

高杉其れを見てクククと笑い「『切れた夏美』は大変だからなア。

夏美イ

『壊してしまえやア』。」

夏美「了解！晋助様！！」そして自分自身に熱気を惑わせナチの軍隊に向かって歩き出した。

ナチの連中もはつと鼻で笑い「たかが・・・女1人で何ができる。」

夏美「・・・『女だからと言って舐めていると痛い目に会っよ？』」

そう言い「火炎風拳・・・火炎風爆龍烈風弾！！！！」

と続け様に「燃えちまいなアアアア！！！！！！！！！！」

すると、夏美の炎がナチの連中を包み燃やし始めた。

ナチの連中の叫びが響き渡る。

其れを見たライカは軽く頭を手で支えて苦笑いをしながら「あちやあゝあいつ、切れてるなア」。

其れを見た他のワカバのメンバーも苦笑いをし「そうだねエ。ライカさん。」

ベルナドット「で？ライカの嬢ちゃん。夏の嬢ちゃんが、切れると何か問題でもあるのかい？」

ライカタバコに火を灯し「・・・場合によっちゃあ、己の拳法を最大限に發揮して力を抑制しきれずに自爆（体内に熱がこもる）か、またアレに（炎龍化）になってしまいます。」

ベルナドット冷や汗かいて「・・・マジかよ。」

ライカ頷き「・・・大マジです。」

するとシュウチェンが「でも、このままだと。ライカさん。まずくない？」

ライカ再度頷き「ああ、確かにチィとこいつはア、ヤベエかも、知れねエなア。」

でも、セラス微笑んで「でも、此れで、燃やしてくれば、私たちの仕事も減るんじゃないですか？

ライカさん。」

ライカ苦笑いをしつつ「まア・・・其れもそうだけど。でもね。セラス。あいつは藍明との戦いで

‘普段専門外の拳法’使ったから多分‘体力的にも肉体的にも限界に来てゐる気がするんだ。’

セラスは「・・・そうですか。」と只呟いていた。

夏美は相変わらず己の火炎風拳でナチの連中を燃やし続けていた。

そして一人たりとも根ざやしにした。

そして終わりをつけた。

セラス其れを見て「・・・どうやら終わったみたいです。」

アーカードもニヤリと笑い「そうみたいだな。『まア私達が出る幕でもなかったが。』」

と同時に夏美は冷や汗をかいてそのまま膝をガクつとした。

ライカ「・・・夏美！・・・」と慌てて夏美の所に行く。

ライカ心配そうに「大丈夫か？」

夏美頷き「あア問題ねエ。」とにやりと笑った。

するとライカ夏美を担いで「・・・お前さんはもう休め！！！！このままだと本当にお前さんの体が！！！」

夏美ニヤリと笑い「・・・別にどうってことないさ。今くらい。」

するとライカがタメ息をつき「・・・お前さんは、昔からこうだな。その辺は、変わってねエ」よ。
「今もな。」

夏美苦笑いをしながら「・・・此れが、私じゃアなんだよ。」

そして悪いな。とも呟いた。

するとライカは高杉の所に行き「・・・高杉様。しばらくこいつお願いしても良いですか？また無茶しそうで・・・。」

高杉「あア、構わねエよ。で？お前エさんはこれからどうするよ？」

ライカタバコい火を灯し「・・・まア、ナチの連中はこいつ（相棒）が全部片付けたみたいですので・・・」

私は香煉館の連中を片づけます。」

香煉館の連中は顔をしかめた。

と同時に香煉館の1人の隊員が「・・・黒龍様。如何なさいます??？」

黒龍フウとため息をつき「……こいつ（ライカ）が相手なら俺等も、ただじゃアすまんだろう」。

先程の夏美みたいにな。」と続け様に藍明を連れて「オイ！お前達！！！！ひとまず体勢を立て直すぞ！！！！引き上げるぞ！！！！」

その声を聞いたライカは「待て！！！！！」

黒龍ニヤリと笑い「・・・また人員増やしてそして体勢を立て直してから、遊んでやるよ」（戦ってやるよ）。」と続け様に「また、会おう！！！！！！！！我が妹よ！！！！」そして消えて行った。

ライカは其れを聞いてかなり驚く。

そしてワカバのメンバーにどよめきが走った。

「い、妹!？」

「ライカさん。此れは一体???」

ライカは只固まりつつもタバコを口に加え日を灯しながら「……
こっちが聞きてエよ。」と呟いて

「夏美。相棒達よ!ひとまず戻るぞ。」

と歩み続けてそして夏美たちはライカに続いた。

そして、高杉達も。

ライカには先程の黒龍の言葉が脳裏に焼き続けていた。

第17夜。夏美VS藍明最終決着後。香煉館の加勢者であるナチ登場！そして相棒達を傷つけた夏美の怒りがナチを襲う！？完。

第17夜。夏美VS藍明最終決着後。香煉館の加勢者であるナチ登場！そして相

今章も無事に更新完了致しました。

今章も御付き合いました。ありがとうございます。

其れではほぼ毎回？のグタグタ予告をどうぞ。

アレからオウガの部屋に来た夏美達。

オウガ「何！？奴が（黒龍）がライカを妹だと！？」

ライフエイ「頷き」あア。俺たまたまそこに居合わせた。それで、奴は退きあげる際にこう言ったのさ。『また会おう！！』、我が妹よ！！』ってな。

まア・・・ライカ自身は分からねエ見てエだけだな。」

そう言いながらライカを見つめるライフエイ。

ライカは只無言のままオウガの部屋を出た。

夏美「・・・ライカ。」

すると土方が「・・・夏美。お前エなら、何か知ってんじゃアねえの

か、？黒龍、と共に一時いたお前エなら。」

夏美軽いため息をつき「・・・あいにくあの男は、自分のプライベ
ート、まで部下にも相棒にも教えていなかったからね。だから、私
しやアも分からんよ。兄貴。」そう言いながら「ちよいと一服して
くるよ。」そう言い部屋を後にした。

と同時にオウガライフエイを見て「・・・ライフエイ。」

ライフエイ頷き「了解した。」そう言い部屋を出た。

オウガは久々にデスクの引き出しに隠してあったタバコを出し火を
灯した。

そして、自分のデスクの上に載せてある末端の頃のライカと夏美そ
してオウガの写真を見て「・・・ライカ。夏美。」と悲しそうに呟
いていた。

その様子をインテグラが悲しそうに「・・・オウガ。」と見ていた。

オウガ「第18夜。ワカバ&日本吸血鬼界達VS香煉館のひとまず
戦終了後。ワカバに戻った夏美達。そして・・・ライカの今の心の
想い。」

「次章もどうぞよろしくな！」以上です。其れでは次章も今章同様
にお楽しみ頂ければ幸いです。

第18夜。ワカバ&日本吸血鬼界達VS香煉館のひとまず戦終了後。ワカバに自

今章は、前章の似た様な話です。

多分長丁場の編集可能性もあります。

検索には載せてありませんでしたが・・・戦国BASARAの双竜組が出てくる予定でもあります。って・・・多分今回は片方かと。其れは見てのお楽しみ。夏美の部屋に出てきます。因みに此処では吸血鬼設定ですので予めご了承ください。汗

第18夜。ワカバ&日本吸血鬼界達VS香煉館のひとまず戦終了後。ワカバに自

香煉館との戦後アレからオウガの部屋に来た夏美達。

オウガ「何！？奴が（黒龍）がライカを妹だと！？」

ライフエイ領き「ああ。俺たまたまそこに居合わせた。それで、奴は退きあげる際にこう言ったのださ。‘また会おう！！’、‘我が妹よ！！’ってな。まア・・・ライカ自身は分からねエ見てエだけだな。」

そう言いながらライカを見つめるライフエイ。

ライカは只無言のままオウガの部屋を出た。

夏美「・・・ライカ。」

すると土方が「・・・夏美。お前エなら、何か知ってんじゃアねえのか、？黒龍」と共に一時いたお前エなら。」

夏美軽くため息をつき「・・・あいにくあの男は、自分のプライベートルト、まで部下にも相棒にも教えていなかったからね。だから、私しやアも分からんよ。兄貴。」そう言いながら「ちよいと一服してくるよ。」そう言い部屋を後にした。

と同時にオウガライフエイを見て「……ライフエイ。」

ライフエイ頷き「了解した。」そう言い部屋を出た。

オウガは久々にデスクの引き出しに隠してあつたタバコを出し火を灯した。

そして、自分のデスクの上に載せてある末端の頃のライカと夏美そしてオウガの写真を見て「……ライカ。夏美。」と悲しそうに呟いていた。

その様子をインテグラが悲しそうに「……オウガ。」と見ていた。

一方、雷外も小声で「……たあく。何てエもん、しよいこんでいるんだ!?」うちの姉御達^{リイダー}は!？」とも呟いた。

一方、ライカは喫煙所において一服をしていた。

そして……。

「また会おう！我が妹よ！」
-

と先程の黒龍の声がこだまする。

何だ！？奴は私しやアの事を「妹」だと！？

何で！？私には兄貴はいなかったはず！！

なのに・・・何故!?

そして心の中であざ笑いながら・・・。

あア・・・・・・・・色々で面倒だな。

黒龍と・・・私は。。

本当に、兄妹??????

良く分からねエや。

ライカタメ息をつきながら「ハア……めんどくせエ」。

すると背後から「何がめんどくさいんだ？」

ライカその声を聞き慌てて驚いてその主を見た。

其処には壁に寄りかかり楽しそうに笑っているアーカードの姿だった。

ライカアーカードのその姿を見て「……アーカード様。」

アーカードはライカの所に歩いて行って「本当に覚えがないのか？」

ライカタバコを口に加え直しながら「ありませんよ。全然。」

アーカードはニヤリと笑い「そうか。」

ライカタバコ吸い続けて苦笑いをし「・・・冷やかに来たんですか
??」

アーカード再度ニヤリと笑い「いや。そう言う訳ではないのだがな。」

一方、夏美は自分の部屋に戻ってタバコ吸い続けていた。

「・・・・・・相棒。」とライカの事を想う。

・・・たあく。私しやアモアレかア？弱くなつたか？？相棒を思つあまり・・・。

いや、思わないと居られなくなつたか？？

と己をあざ笑つた。

すると、急に夏美の部屋に、まがまがしい気配、が入つて来た。

夏美タバコを加え直しギンガを素早く取り出してその方向にギンガをやり「・・・誰だい？？其処にいるのは分かつてんだ。出てきな
！！」

すると男の声でククと笑い「流石だな。嘗ては、闇の始末屋炎龍と呼ばれた事はあるな。夏美。」

と黒髪のアールバックで黒のスーツに身をそして、その中には白のＴシャツに靴は黒の靴を履いていた。

右ほほには刀傷があつた。

夏美は驚いた表情で「な、何で！？こつ此処に貴方様がいるんです！？片倉様ッ！！！！」

とこの男の名を呼んだ。

そつこの男の名は片倉小十郎。奥州会の会長である伊達政宗の側近の竜の右目であり、高杉やアーカーダ達と同じ吸血鬼で夜を生きる者。と同時に黒龍は知らないが、黒龍が夏美に出会う前に炎龍時代の夏美を拾い側に置いた。いわば高杉や土方同様に夏美にとってはいろんな意味での命の恩人である。

因みに、後に出てくる政宗も小十郎も夏美の事を気に行っているからなおさらタチが悪い。（笑；）

小十郎ニヤリと笑い「よオ。久しいじゃねエか。ずいぶん探したんだぜ？夏美。」

夏美冷や汗をかきながら「・・・。」

ど畜生！！よりによつて何でこの方が出てくるんじやい！！！！やり
ずれエじゃねエか。

私しやアとした事がよりによつて命の恩人に手エ出すとは。

妙な勘繰りが鈍ったか??

焦りながら・・・。

~~~~~

よりによって……片倉様なんて。

クソッ！！どづするよ！？

どうするよ!？

其れよそに小十郎は楽しそうに夏美に近づいてきた。

「どうした？久々の再会じゃねエか。もう少し嬉しそうにしたらどうだ？」

夏美は一步退く状態になっていた。

・・・アーカードさん達もあの男も怖いけど、この方も尚更怖い!!

さて、どうするよ。

と同時に壁にぶつかった。

夏美「・・・しまった。」そして急いで逃げようとした次の瞬間。

不意打ちをつかれたのか腕を引かれ壁にぶつけられた。

夏美痛みで顔がしかめると同時に小十郎が夏美に顔を近づける。

「なァ・・逃げる事はねえだろよ。昔はあんなに政宗様や俺に懐いていたじゃねエか。あの頃のお前エは一体どうしたよ???」  
「と笑いながら言った。

と続け様に耳元で「もし、忘れたなら思い出させてやろうか?」と囁く。

夏美は「・・結構!!!」そう言いギンガを小十郎の額に向けて「確かに、貴方様方にはお世話になりました。けど、其れは昔の話であつて、今の私は、炎龍ではなく、ワカバ、そしてヘルシング日本支部の橘夏美なんです!!!もし、私に炎龍を求めているのであればそれは叶わぬ夢ッ!!!どうぞお引き取りを!!!!!!」と。

小十郎はその事を聞きクククと笑い「・・俺は、炎龍を求めているわけじゃねエんだぜ?お前自身だ。

其れに、政宗様のご命令で、お前を連れ戻せ」と事をお使っているんだ。だから、悪いな俺も退くわけにもいかなエんでな。」

その事を聞いた夏美はギンガの引き金を思わず引こうとしたが・・・。

引けなかった。

小十郎の事も政宗の事もワカバと同様に思っているからだ。

夏美「・・・其れでも。私は、行けません」。私は私の宿命を。」

247

その事を話を続けようとした次の瞬間「其れは、あまりにも連れねえんじゃアねエか？ My Little girl？」その声を聞き小十郎は夏美から離れてその声の主に向かい一礼をする。

夏美さらに驚き「・・・んなアアア！！？まつ、政宗様アアア！！！！！！」

と思わず叫んでしまった。



そう其処には奥州会筆頭伊達政宗がいた。

政宗夏美を見てニヤリと笑い「Hey! やつと会えたな? My Little girl!」

夏美は思わず両手で頭を抱え込んでその場に崩れ落ちて苦笑いをしつつ小声で「・・・今日は、災難だ。」

いろんな意味で。」と呟いた。

第18夜。ワカバ&日本吸血鬼界達VS香煉館のひとまず戦終了後。ワカバに戻った夏美達。そして・・・ライカの今の心の想い。完。

第18夜。ワカバ&日本吸血鬼界達VS香煉館のひとまず戦終了後。ワカバに自

大分更新遅くなりましたが・・・無事に更新完了致しました。

其れでは、ほぼ毎回？ではありませんがグタグタ予告をどうぞ。（笑；  
）

夏美。

あア・・・どうしてだろう？どうもこの方たちは、私の事を、手放してくれないのだろう？よくわからないや。

と同時に緊急警報が鳴った。

夏美は慌てて政宗達からひとまず離れて無線機を押しながら「私しやアだ！！こいつは一体何事だ！？」

『なつ、夏美様アア！！ヴぁ、ヴァチカンの連中っス！！ヴァチカンの連中が・・・香煉館の連中が引き連れたグール共を引き連れて此方に攻めて来たッス！！』

高杉の側近である来島また子が慌てて応答した。

夏美驚いた顔で「なつ、何だと！？んで！？攻めて行く標的は！？」

また子再度慌てて『お、オウガ様のお部屋っス！！！！』

夏美其れを聞いて「なっ、何だとオオ！？このままだと兄様の身が来ッちゃん！！相棒達には知らせてくれた？？」

また子領き『はいっス！！』

夏美領き「よし！ジャア！！私しゃアも行くから何としても時間稼いで頂戴！！！」

また子領き『了解っス！！』

そして、通信は終わった。

と同時に夏美はギンガの銃弾を補充し懷にしまいこみ急いで下に行こうとしたが、片倉に止められる。

夏美「片倉様！お離してください！！」

片倉は夏美を後ろから抱き寄せ「・・・行くな！！ヴァチカン相手だと分が悪い！下手すればお前・・・死ぬぞ??」

夏美フツと笑い「・・・死にませんよ。私は。」と続け様に「ワカバを見捨てたら・・・私しゃアは私しゃアでいられなくなるんです。」とも呟いた。

と同時に「・・・私は橘家本家の人間！ワカバを護る義務がある！！」

そして続け様に「・・・ごめんなさい。もうあの頃の炎龍（私夏美）はいないんです。今の私は・・・ワカバにお仕えする‘橘夏美’なの

です。私は、

父母にあの時誓いを立てた。その誓いを果たす為ならこの身がどうなってもかまわない。」そう言い夏美は小十郎の腕をすんなりと外し自分の部屋の扉を開け「兄様アアアアアアアア！！！！橘夏美只今参ります！！どうか御無事で！」そう叫びながらオウガの部屋に向かった。

一方、夏美の部屋に取り残された小十郎はフツと笑い「・・・あの時の炎龍（お前）はいないだとか？？？其れは「お前自身が気が付いていないだけだ」と俺は思うぜ？？」と同時に政宗ニヤリと笑い「Hey！小十郎！いまだに消えないなら。このまま壊してしまえばいい。場所をなくしてやればいい。そうすれば例え嫌でも俺たちの下にあいつ炎龍ではなくとしても戻ってくるだろ？You see？」

自分の主のその言葉を聞きニヤリと笑い「・・・そうですな。政宗様。」そして政宗は小十郎の前を通り過ぎながらも再度ニヤリと笑い「まして、俺たちはあいつをまだ逃がしているつもりもねエし、今後もし逃がすつもりもねえ。だろ？」小十郎頷き「そうですな。」

俺達から逃げよう何ぞア無駄なんだよ。夏美。

一方、夏美は「どけエエエエエ！！ザコ共がアア！！（ゲール）兄様アア！！」とギンガを乱射しゲール達をなぎ倒していた。

と同時にオウガの部屋を見つけ急いでドアを開け「兄様ツ！！！！」と同時に「・・・なっ！！！！！！？」と驚いた表情をして部屋を見た。其処には血だらけのオウガと・・・そして・・・  
・・・そして・・・そして・・・そして・・・  
・・・

手元に血だらけのバイオネットを持ったアンデルセンがニヤリと笑い「久しぶりだな。ワカバの小娘。」

夏美怒りで、「アンデルセエエエエン！てめええええええええええ！！！」

[illegible]

兄様をオオオオオ！！！！てめエだけは、てめエだけはッ絶対に許さネエ！！」

そして心の中でクソッ！！私はまた護れなかったのか！？大事なものをッ！

そう呟きアンデルセンを睨みつけ「・・・『地獄』リンボに送ってやるよ！アンデルセン！この『俺』橘夏美がなあアア！！」

するとメグナが遠目であちやあちと頭を抱え「姉さん切れちまったな。こりやア。」と呟いていた。

まア・・あの神父さんには悪いけど、あの神父さんは姉さんにとって‘悪い事’をした。だから切れられも致し方ないけどね・・。とも心の中で呟いた。

「アンデルセンはニヤリと笑い「・・・すべては、ヴァチカンの為に！  
ワカバもヘルシングも邪魔なのだよ！だから、消してやった」。  
神の名のもとになア。」

すると夏美はさらに「殺気」を出して「……」「狂ってやがる  
」「！てめエ等。そんなに「俺から大事なものを奪うのが楽しいのか  
よ！」「」

クソクソツ！！チイくしょう！！！！

夏美はもうすっかり「復讐の炎の龍化」していた。

するとライカ達も入って来て「相棒ツ！」と続け様に「……兄様<sup>にい</sup>ツ  
！」とライカはオウガの下にやって来て「……ツ！！！」と顔しか  
めた。

と同時に「……ありやア。もう「なっちまったなアレに」。」と夏  
美を見て呟いた。

ライカ「第19章。アンデルセンの手でオウガ死す！？その光景を  
見た夏美が怒りの刃を向けた。」と続け様に「次章も宜しくね。」

以上です。次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

**第19夜。 アンデルセンの手でオウガ死す！？その光景を見た夏美が怒りの刃を**

此方はずいぶん御無沙汰しております。

と同時に今章はかなり残酷等予定です。

予めご了承頂きたいと思います。

其れでは本編です。

第19夜。アンデルセンの手でオウガ死す！？その光景を見た夏美が怒りの刃を

夏美。

あア・・・どうしてだろう？どうもこの方たちは、私の事を、手放してくれないのだろう？よくわからないや。

と同時に緊急警報が鳴った。

夏美は慌てて政宗達からひとまず離れて無線機を押しながら「私しやアだ！！こいつは一体何事だ！？」

『なつ、夏美様アア！！ヴぁ、ヴァチカンの連中つス！！ヴァチカンの連中が・・・香煉館の連中が引き連れたグール共を引き連れて此方に攻めて来たツス！！』

高杉の側近である来島また子が慌てて応答した。

夏美驚いた顔で「なつ、何だと！？んで！？攻めて行く標的は！？」

また子再度慌てて『お、オウガ様のお部屋つス！！！！』

夏美其れを聞いて「なつ、何だとオオ！？このままだと兄様の身が来ッちゃん！！相棒達には知らせてくれた？？」

また子頷き『はいっス！！』



夏美頷き「よし！ジャア！！私しゃアも行くから何としても時間稼いで頂戴！！！」

また子頷き『了解っス！！』

そして、通信は終わった。

と同時に夏美はギンガの銃弾を補充し懷にしまいこみ急いで下に行こうとしたが、片倉に止められる。

夏美「片倉様！お離してください！！」

片倉は夏美を後ろから抱き寄せ「・・・行くな！！ヴァチカン相手だと分が悪い！下手すればお前・・・死ぬぞ??」

夏美フツと笑い「・・・死にませんよ。私は。」と続け様に「ワカバを見捨てたら・・・私しゃアは私しゃアでいらなくなるんです。」とも呟いた。

と同時に「・・・私は橘家本家の人間！ワカバを護る義務がある！！」

そして続け様に「・・・ごめんなさい。もうあの頃の炎龍（私夏美）はいないんです。今の私は・・・ワカバにお仕えする‘橘夏美’なのです。私は、

父母にあの時誓いを立てた。その誓いを果たす為ならこの身がどうなってもかまわない。」そう言い夏美は小十郎の腕をすなりと外し自分の部屋の扉を開け「兄様アアアアア！！！！橘夏美只今参ります！！どうか御無事で！」そう叫びながらオウガの部屋に向かった。

一方、夏美の部屋に取り残された小十郎はフツと笑い「・・・あの時の炎龍（お前）はいないだとか？？？其れは「お前自身が気が付いていないだけだ」と俺は思うぜ？？」と同時に政宗ニヤリと笑い「Hey！小十郎！いまだに消えないなら。このまま壊してしまえばいい。場所をなくしてやればいい。そうすれば例え嫌でも俺たちの下にあいつ炎龍ではなくとしても戻ってくるだろ？You see？」

自分の主のその言葉を聞きニヤリと笑い「・・・そうですな。政宗様。」「そして政宗は小十郎の前を通り過ぎながらも再度ニヤリと笑い「まして、俺たちはあいつをまだ逃がしているつもりもねえし、今後もし逃がすつもりもねえ。だろ？」小十郎頷き「そうですな。」「

俺達から逃げよう何ざア無駄なんだよ。夏美。

一方、夏美は「どけエエエエエ！！ザコ共がアア！！（グール）兄様アア！！」とギンガを乱射しグール達をなぎ倒していた。

と同時にオウガの部屋を見つけ急いでドアを開け「兄様ツ！！！！」と同時に「・・・なっ！！！！！！？」と驚いた表情をして部屋を見た。其処には血だらけのオウガと・・・そして・・・そして・・・そして・・・そして・・・そして・・・そして・・・そして・・・

手元に血だらけのバイオネットを持ったアンデルセンがニヤリと笑い「久しぶりだな。ワカバの小娘。」「

夏美怒りで「アンデルセエエエエエン！てめエエエエエエエ！！！！！！！！！！」

[illegible]

兄様をオオオオオ！！！！てめエだけは、てめエだけはッ絶対に許さネエ！！！」

そして心の中でクソッ！！私はまた護れなかったのか！？大事なものをッ！

そう呟きアンデルセンを睨みつけ「……『地獄』リンボに送ってやるよ！ アンデルセン！ この『俺』橘夏美がなあアア……！」

するとメグナが遠目であちやあちと頭を抱え「姉さん切れちまったな。こりやア。」と呟いていた。

まア・・あの神父さんには悪いけど、あの神父さんは姉さんにとって‘悪い事’をした。だから切れられも致し方ないけどね・・。とも心の中で呟いた。

「アンデルセンはニヤリと笑い……すべては、ヴァチカンの為に！  
ワカバもヘルシングも邪魔なのだよ！だから、消してやった」。

神の名のともになア。」

すると夏美はさらに「殺氣」を出して「……狂つてやがる  
、！てめエ等。そんなに、俺から大事なものを奪うのが楽しいのか  
よ！、」

クソクソッ！！チイクしょう！！！！

夏美はもうすっかり、復讐の炎の龍化、していた。

するとライカ達も入って来て「相棒ッ！」と続け様に「．．兄様にいッ！」とライカはオウガの下にやって来て「．．ッ！！！」と顔しかめた。

と同時に「．．ありやア。もう、なっちまったなアレに、。」と夏美を見て呟いた。

夏美「てめエだけは、てめエだけは．．てめエだけはッ！！絶対に許せねエ！！！！よくもよくも兄様を

ッ兄様をッ！！！！よくもッ！！！！よくもッ！！！！てめエだけは俺が俺がアアアア！！！！」と怒りに満ちそしてその両目には涙がにじんでいた。

アーカードも合流し「．．ほう。夏美、なったか。だが．．。」と続け様に「夏美。そいつは、私の御敵だ。手出しはするな？」

夏美アーカードを見て「アーカードさんッ！！止めないでくださいッ！！この男だけはこの男だけは、俺の手で地獄に送らなきゃ気が済まないんです！！！！！！こいつは、俺から大事なものを奪った！！

！、しかも「神の意志とかくだらねエ事で！！」と怒りに満ちて言った。

アーカードはその原因を察知したのかなるほど心の中で呟いた。

アンデルセンはそれを聞いてニヤリと笑い「・・・そんなにその男が大事なのか？」

夏美怒りまみれになりながら「当たり前だッ！！このお方は俺に『あえて言うなら表で再度生きる意味』を与えて下さった方だ！！！！其れに俺は橋本家の人間！！両親と約束した誓いがあるんだ！！

その誓いを果たすのであれば俺はワカバの一員として朽ち果てても良い！！！！其れが俺の覚悟だ！！！！」そう言い「だが、アンデルセン！！てめエはてめエ等のくだらねエ思想で兄様を危険にさらした！此れだけは許せねえエ！！！！俺の炎で全部焼き尽くせ！！！！」そう言い火炎風拳を再大力にした。

ライカ其れを見て「・・・ダメだ！相棒！！！！」と叫んだ。

其れと同時に夏美は「止めるなッ！……相棒ッ！……こいつだけは……こいつだけは……」

だけは……！……！本当に許せねえんだ……！……！例えこの俺の身を犠牲してまでも……こいつだけは……！……」

ライカは叫んだ「落ち着け……！……うちらが『中立派』だッて事忘れたか……！……！？堪えるんだ……！……」

今お前さんが此処で大暴走して元も事もねえんだぞ……！……！お前さんは、此処のリーダーなんだ……！……！リーダーが冷静にならなくてどうする……！……！？ましては此処は伊達様方までいるんだぞ……！……！今は落ち着け……！……！相棒……！……！……」

夏美はライカを見て「お前は悔しくはねえのかよ……！……！？」

ライカギリつと口をかみしめながら「悔しくないわけがないだろう……！……！……！……！私らの大切な兄様ボスがやられたんだからな……！……！だが、堪えるしかねえ……！……！兄様ご自身が『あくまでも中立派』を望まれているからな……！……！……」

夏美はそれを聞いて顔しかめたと同時に「・・・すまねえ。相棒。どうやら私は・・・いや、俺は、」

我慢できねえみたいだ。そして、自身から炎を出し「・・・俺を怒らせた事、あの世で後悔するんだな？」アンデルセン。」と殺気が多く出た。

ライカは「ダメだ！！！！！！相棒！！！！！！！！！！」とひたすら夏美に叫びこむ。

だが、夏美自身は「・・・俺はワカバの復讐者、もう、無理さ。」

と同時に小さな声でごめんな？とつぶやいた。

そしてアンゼルセンを見て「許さない！！！！只で帰れると思うなよ！！！！俺は絶対に貴様を！！」

そう言い翡翠刀を手につけアンデルセンに向かってやろうとした次の瞬間。

「ま、待て！！！！な、なつ・・み！！！」と呼ぶ声がある。

と同時に夏美はその声の主の方に眼をやり「あ、兄様！！！」そう言い急いでオウガの所に行った。

そして「大丈夫ですか??？」

オウガはフツと笑い「あ、あア・・何とかな。」

夏美は内心ほつとしたと同時に「ライカ！兄様の大至急手当を！！！」

ライカは頷きオウガを連れて医務室へと向かった。

と同時にアンデルセンに再度今度は翡翠刀ではなく雷月を持ち鞘から抜きながら「もう一度手合わせでも行こうじゃねエか？」神父さんよオ。」

アンデルセンはそれを見て高笑いしてバイオネットを構え始めた。



第19夜。アンデルセンの手でオウガ死す！？その光景を見た夏美が怒りの刃を向けた。完。

第19夜。 アンデルセンの手でオウガ死す！？その光景を見た夏美が怒りの刃を

今章も遅くなりましたが・・・大変に無事に更新完了する事が出来ました。

お付き合い下さいまして有難うございます。

其れではほぼ毎回の???グタグタ予告をどうぞ。

雷月・・・其れは「昔小十郎からもらった刀」

夏美は心の中で・・・まさか、「使う日が来るとはね。」「本当なら使いたくないんだが・・・この男が相手なら仕方ないか。」

265

そう呟きながらアンデルセンを見て再度「・・・アンタの相手は再度この橘夏美だ。」覚悟しろ？こいつ出したからには先程と同じ様にはいかねエゼ？」アンデルセンはそれを見て再度ニヤリと笑いながらヴァイオネットを

持ち夏美に突進して行った。

そして夏美は雷月を構えて「轟け！！！！我が雷よ！！！！雷神ッ！！！！」

そう言いながらアンデルセンに向かって雷を落とした。

第20夜。 アンデルセンVS夏美！

次章もどうぞ宜しくお願い致します。

今章も御付き合い頂きありがとうございました。

第20夜。アンデルセンVS夏美！そして・・雷月。（前書き）

此方も大分ですか更新となりました。

全部の連載に共通しますが・・基本的にネタ浮かび次第の更新となります。

その為中々更新出来ていないものもあるのかもしれませんが、その辺もご理解とご了承のほど宜しくお願い致します。

少々サブ変えてみました。

長丁場のまた残酷シーン等ありの予定です。

## 第20夜。アンデルセンVS夏美！そして・・・雷月。

雷月・・・其れは、昔小十郎からもらった刀、

夏美は心の中で・・・まさか、使っ日が来るとはね。、本当なら使いたくないんだが・・・この男が相手なら仕方ないか。、

そう呟きながらアンデルセンを見て再度「・・・アンタの相手は再度この橘夏美だ。、覚悟しろ？こいつ出したからには先程と同じ様にはいかねエゼ？」アンデルセンはそれを見て再度ニヤリと笑いながらヴァイオネットを持ち夏美に突進して行った。

そして夏美は雷月を構えて「轟け！！！！我が雷よ！！！！雷神ッ！！！！」

そう言いながらアンデルセンに向かって雷を落とした。

一方、ライカは医務室でオウガの手当てをしていた。

オウガは申し訳なさそうに「・・・すまん。ライカ。有難う。」

ライカは首を横に振り微笑んで「お気にせず<sup>にい</sup>に。兄様寧ろ、御無事で何よりです。」

と同時にオウガもフツと笑い「お前もそしてみんなも無事でよかつたよ。俺も安心した。」

其れを聞いたライカは只只涙を流していた。

一方夏美はと言うと相も変わらずアンデルセンと対峙していた。

雷月を構えてそしてアンデルセンを見て「もう一回喰らいなっ！！ただでは帰さないよ！！」

と続け様に「喰らえ！穿月！！！（うがちづき）！」

あの技を見たセラスは心の中で・・・・・・・・・・。

あれは、穿月！あの技は奥州会の片倉小十郎の技！どうして夏美さんが？

そしてアンデルセンに喰らわせアンデルセンがひるんだ。

と同時に夏美アンデルセンを見て「此れで終わると思つなよ？鳴神！！！！」

と続け様に鳴神を喰らわした。

アンデルセンも心の中でセラスと同じことを思っていた。

‘何故、奥州会の竜の右目の技を？この小娘がと。’

夏美はアンデルセンを見て「何故、私、がこの技を使える事が出来るのか、不思議な顔、しているな？」

其れはな・・・雷月流雷憑依派。事前に・・・コピーしておいたのさこの刀にな。後、この刀は黒龍の次に最強な刀。片倉小十郎直々に私が昔もらった刀さ。だから・・・大体、同じ技を使用する事、が可能なのさ。」とあっけなく言った。

と同時にアンデルセンは夏美を見て「じゃ・・・昔片倉の側にいた小娘は、？」

夏美タバコに火を灯し「・・・言いたくねえがこの私じゃアだよ。」と言いのけた。

と続け様に「だが・・・其れは、昔の事、今は、ワカバに仕える橘夏美だアア、！！」

そう言い再度雷月を構えて雷をまといながら「もう一回喰らえ！！！！鳴神イイイ！！！！！！」



雷を渦を巻きもう一度アンデルセンに向かって放った。

だが、アンデルセンは軽くかわし後ろに向かいヴァイオネットを再度夏美に向かって斬りかかった。

と同時に夏美は潔く構え直しヴァイオネットを受け止めた。

と同時に共にアンデルセンと一緒にいたハインケルと由美江が驚いた。

夏美はタバコ吸いながら「此れだけで終わると思うなよ？」そう言いながらヴァイオネットを抑え込みながら「・・・喰らえ！！雷月流・・・雷月龍神！！」その技は雷月の最大の技でもあった。

アンデルセンはそれをくらいその場に崩れた。

と同時に夏美は雷月を鞘に収め「・・・少しでも私の今の心の痛みが伝われば嬉しいよ。」そう言い

その場を去ろうとした。

だが由美江に「くそ！よくも神父を！！！！」と襲いかかろうとした次の瞬間。

夏美は殺気を帯びて由美江を睨みつけた。

いつの間にか由美江はその場に崩れ落ちていた。

夏美はそれを確認するとフツと笑い今度こそその場を後にし部屋に戻って行った。

第20夜。アンデルセンVS夏美！そして・・・雷月。完。

## 第20夜。アンデルセンVS夏美！そして・・・雷月。（後書き）

今章も無事に更新完了しました。

遅くなりましたが此処まで読んで頂きありがとうございます。

さてとほぼ毎回ではありますが・・・グタグタ予告をどうぞ。

夏美はアレからライカからオウガの手当て終わり無事だと言つ事を聞かされ安心し部屋に戻った。

だが・・・1人の男がいた。

オイオイ・・・ひょっとしてまたこの男か？？

そう心の中で呟き嘗てアジトの裏にある洋館にいた男を思い出す。

そして再度警戒し雷月と翡翠刀に手をかける。

と同時にククと笑い声がし「・・・」そう警戒するな橘家本家の小娘。  
、  
、

だが、夏美は相も変わらず警戒を解かないすると突然風が一筋吹き夏美が前を見るとその男がいなくてそして何処だと見渡せていると背後からいきなり

抱きつかれ様としたと同時に潔く鞘から雷月と翡翠刀を抜こうとした次の瞬間両腕をいつの間にかひねられていた。

・何でッ！　あの時巻いたはずなのに！！’

そうその男は前夏美が偵察で行った洋館に住んでいた男ディーンだった。

第21夜。アンデルセンとの対峙後の夏美が部屋に戻り再びディーンと再会？

以上です。今章も御付き合い下さいまして有難うございます。

また次章もどうぞ宜しくお願い致します。

第21夜。アンデルセンとの対峙後の夏美が部屋に戻り再びディーンと再会？

今章もご覧いただきありがとうございます。

久々の更新となりますか……。年内最後ですね。

此方も長丁場等残酷シーン等ありになりそうですので予めご了承ください。

## 第21夜。アンデルセンとの対峙後の夏美が部屋に戻り再びディーンと再会？

夏美はアレからライカからオウガの手当て終わり無事だと言つ事を聞かされ安心し部屋に戻った。

だが・・・1人の男がいた。

オイオイ・・・ひょっとしてまたこの男か？？

そう心の中で呟き嘗てアジトの裏にある洋館にいた男を思い出す。

そして再度警戒し雷月と翡翠刀に手をかける。

と同時にククと笑い声がし「・・・そう警戒するな橘家本家の小娘。  
,」

だが、夏美は相も変わらず警戒を解かないすると突然風が一筋吹き夏美が前を見るとその男がなくてそして何処だと思渡せっていると背後からいきなり

抱きつかれ様としたと同時に潔く鞘から雷月と翡翠刀を抜こうとした次の瞬間両腕をいつの間にかひねられていた。

・・・何でッ！『あの時巻いたはずなのに！！』

そうその男は前夏美が偵察で行った洋館に住んでいた男ディーンだった。

何でいるんだ！？此処に！！！？クソッ！このままだと本当に多分

やられる！！

夏美は抵抗を試みたが・・・ディーンはそれをあざ笑うかのように見ていた。

クソ！！！あざ笑いやがって・・・なんかむかつくな。あア・・・い  
つも以上に私しやアがいらついているからか？？？何故か知らん  
が・・・。。。

冷静さをかけている。いつも以上に・・・・・。

其れと同時に夏美の首筋にいつの間にかと息がかかった。

夏美は察知したこのままだと食われる・・・。

すると夏美の体の周りに炎が舞った。

ディーンはそれを見て一瞬退く。

と同時に夏美は「・・・悪いね」「あの方たち以外に喰われる訳にもいかねェんだ。」そう言いディーンの所から消えた。

ディーン其れを見てフツと笑い「・・・面白い女だ。」ますます逃がしはしない。「そう呟いて部屋を後にした。

一方、夏美は廊下で歩きながらタバコを吸い続けていた。

・・・どうして。吸血鬼に狙われるんだろうね私しやアは。

表と闇の「2つの顔持つからか??」

夏美は苦笑いしたため息をつき「・・・ざまアねェな。」と呟いた。

と同時に再度気配を感じた。

夏美は警戒しながら「・・・誰だい?」其処にいるのは??」



すると「ちょっとちょっと！ータンマ！ー夏さん俺だよ俺！ー銀時だ！ー」と山崎の嘗ての同族だった

銀時がいた。

夏美は驚いて「ちょ！？銀の旦那！？」そう言い慌てて空いている部屋へと誘った。

高杉達が見ているのも知らずに・・・。

第21夜。アンデルセンとの対峙後の夏美が部屋に戻り再びディーンと再会？完。

第21夜。アンデルセンとの対峙後の夏美が部屋に戻り再びディーンと再会？

有難うございます。無事に更新完了致しました。

久々ですね。ちょっと後半は銀さん入りましたが其処は大目に見て頂ければと思います。（一礼笑；）

其れではほぼ毎回ですがグタグタ予告風？をどうぞ笑

此処はワカバの空き部屋。

アレから夏美は銀時と突然の再会を果たし、ばれないように・・・空き部屋に

呼び込んだ。

夏美小声で「ちょ！旦那何しているんです！？此処にはさっきまで晋助様達がいたんですよ！？」

銀時其れを聞いて驚き「え！？マジでカ！？」

夏美頷き「オオマジですよ！！晋助様はともかく・・・土方の兄貴は銀の旦那の事狙っています。見つからないように・・・逃げる事お勧めしますよ。」

と同時に「特殊ですからね・吸血鬼に咬まれば自然と吸血鬼化してしまいますからね。」とも付け加えた。

銀時はそれを聞いて軽くため息をつき「・・・吸血鬼化はひとまず今はごめんだね。」俺アもう少しこの状態を楽しみたいのさ。」と同時に「で？」

「ジミーの奴は？」

夏美はそれを聞いて軽くため息をつき「・・・晋助様と出会った時にすでに吸血鬼化」されたみたいですよ。」

銀時其れを聞いて「・・・マジでカ。ジミーが高杉に連れ去られたのは分かったんだが・・・まさか「なっていたとはな」。」そう言い「有難うよ。」と言いつぐに消えた。

夏美はその場でため息をつきタバコを再度口に加え直した。

「・・・ヤレヤレ」色々な意味で大変だな。」と呟いた。

夏美「第22夜。夏美と銀時久々の再会。」

「次章もどうぞ宜しくね？」

以上です。有難うございました。

第22夜。夏美と銀時久々の再会。（前書き）

大分ご無沙汰ですかな汗

今章はですね夏美が銀さんと再会する所から書かせて頂きます。

昔チィと知り合った仲です。

此方も前章同様に長丁場等予定です。ご了承ください。

## 第22夜。夏美と銀時久々の再会。

此処はワカバの空き部屋。

アレから夏美は銀時と突然の再会を果たし、ばれないように・・空き部屋に

呼び込んだ。

夏美小声で「ちょ！銀の兄さん何しているんです！？此処にはさっきまで晋助様達がいたんですよ！？」

銀時其れを聞いて驚き「え！？マジで力！？」

夏美頷き「オオマジですよ！！晋助様はともかく・・土方の兄貴は銀の兄さんの事狙っています。見つからないように・・逃げる事お勧めしますよ。」

と同時に「特殊ですからね・・吸血鬼に咬まれば自然と吸血鬼化してしまいますからね。」とも付け加えた。

銀時はそれを聞いて軽くため息をつき「・・吸血鬼化はひとまず今はごめんだね。」俺アもう少しこの状態を楽しみたいのさ。」と同時に「で？」

「ジミーの奴は？」

夏美はそれを聞いて軽くため息をつき「・・・晋助様と出会った時にすでに吸血鬼化」されたみたいですよ。」

銀時其れを聞いて「・・・マジで力。ジミーが高杉に連れ去られたのは分かったんだが・・・まさか「なっていたとはな」。「そう言い「有難うよ。」と言いつぐに消えた。」

夏美はその場でタメ息をつきタバコを再度口に加え直した。

「・・・ヤレヤレ」色々な意味で大変だな。」と呟いた。

と同時に頭をかきながら「・・・晋助様達に見つからないといいんだけど。」

それと・・・。

あの「双竜（伊達組）」にも。

夏美は「誰もいなくなった部屋に腰をいつの間にか下ろしていた。」

そして、タバコの煙を吐き出していた。

すると、窓の外から雨の音がし始めた。

夏美はタバコを再度口に加え直して外を見て「・・・雨か。」と呟いていた。

・・・そういやア。政宗様達と、最初に会った日も雨の日だったっけか？

「もうすっかり忘れていたよ。」

そう心中で呟きつつタバコを吸い続けていた。

と同時にあくびが出る。

「眠たくなつたな。」「でもここで寝てしまったら・・・。捕まるな。多分。」と苦笑いしながら呟いた。

また捕まるかも知れねエな。と再度苦笑いしながら心の中で呟いた。

たアくもう・・・何で私しゃアってこうも吸血鬼達とつながりが深いのかね。

だけど・・・何故かしらないがもう限界だった。

夏美自身はタバコを灰皿にもみ消してソファーに身を預けていつの間にか眠っていた。

すると、小十郎が入って来た。そして夏美の所に行き横に座っていた。

小十郎はそれを見てフツと笑いながら「・・・無防備丸出しだぜ？夏美。」と頭を撫でていた。

夏美はくすぐったそうな顔してごろんと横になっていた。

小十郎はその様子を見て再度フツと笑い頬を撫でていた。

そして寝言で「・・・父さん、母さん。私・・・ちゃんと果たせてんのかな？」と今は亡き父大樹と母楓に向かってつぶやいていた。



小十郎はそれを聞いて夏美の髪を撫でながら「……お前エ寂しいのか？」

ワカバの末端の頃に約10数年前位に起きた広州とワカバの大戦。

それで橘姉妹は両親を失った。

小十郎は夏美を抱き寄せて「……俺がいる。いや、俺たちがいるだからもう寂しがるな。」と呟いた。

一方、外では山崎が高杉に言われて見張っていた。

「あゝあゝ彼女に揺さぶりかけるのは結局あの男達ヒトなんだな。」と呟いていた。

と同時に後は「……あの欲望の人？」

其れと、ディーン、ジン……か。

「ま！何にせよ。アレだ。彼女は（夏美さん）高杉さん達の物他の奴らには渡さないんだから。」

すると、高杉から連絡入り戻るように言われ山崎はとても嬉しそうに高杉の元に戻って行った。

其れを1人の男が見ていた。

「いやはや、やはり彼が（山崎）あの男の所にいたのは確かなようだね。」と続け様に歩み出して

「……まさか、夏美やライカもいるとは思わなかったよ。」さてさて……どうするべきか。」

否……「奪うべき」またこうも言いかえられるね「取り戻すべき」か。

いやはや楽しみは尽きないものだな。

「だが、その前にあの少年、にも会いに行くか。」

そう呟きながらその男は歩み出した。

男の正体は何と吸血鬼界の梟雄で吸血鬼界の中で最も危険な己の欲望に忠実な人物松永久秀だった。

一方、その様子を特殊ダムピール界の風来坊前田慶次が見ていた。

慶次は冷や汗かきつつも小声で「・・・間違いねえ。松永さんだ。」と呟きつつどう逃げるかを考えていた。

因みに、久秀が言っていた少年は彼の事である。

その詳細についてはとりあえず不明。

慶次はその場を立ち去ろうとした次の瞬間。

「おや？もうお帰りかね？」と久秀の声がした。

慶次はそれを聞いてその場にかたまってしまったていて後ろを見てしまった。

すると其処には久秀がいた。

久秀は慶次を見ると楽しそうに笑い「ごきげんよう。少年。久しいね。」と言った。

慶次は心の中で……。ああ、どうして思い通りにいかないのだろう？会いたくないと思っていた人に

会ってしまった。

逃げよう。此処にいとまずい。と呟きつつも逃げようとしたがあとという間に久秀に腕を掴まれて

「せつかくの再会だ。そうも逃げなくても良いだろう？」とニヤリと笑いながら慶次を見て言った。

第22夜。夏美と銀時久々の再会。完。

## 第22夜。夏美と銀時久々の再会。（後書き）

有難うございます。無事に更新完了致しました。

最後には銀さんとはあまりかわらない御話になってしまいました  
が苦笑；

其処は大目に見て頂ければ幸いです。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告風をどうぞ。

ああ・・・会ってしまった。俺の、いや・・・俺達の亀裂を生んで  
して、

俺の心の中にある深き闇をつくってしまった人に、

すると久秀は慶次を見てフツと笑い「卿にしては珍しい。抵抗し  
いのかね？」と聞いた。

慶次はそれを聞いて久秀をまるで睨みつけるかの様に「抵抗して  
どうせ逃がしてくれねえんだろ？」と聞きなおした。

久秀はそれを聞いてククと楽しそうに笑い「良く分かってるじゃ  
ないか。

そうだよ。逃がさないよ。卿はあの日、あの時私と出会ってから  
でに私から逃げられない運命のだよ。諦めたまえ。少年。」そう  
言いながらいつの間にか後ろに素早く周り慶次の首に手刀を入れ  
気を失わされた。

そして慶次の体を抱えて再度ククと笑い「新しい闇の世界によこそ。少年。」と楽しそうに呟きつつ「私がまた卿の中にある私がいれた深き闇を育ててあげようじゃないか。」いやはや・・楽しみは尽きないものだ。

そう再度呟きつつも歩みながら闇の中に消えて行った。

一方、その様子を遠目で見ていた夏美のクノーメグナがいた。

メグナは冷や汗かきつつも「ありや・・松永の旦那さんじゃないのさ。」

ヤバいぞ。もし、私しやア様の勘とライカの姉さんの勘が正しければ間違いないく近いうちに姉さん達に会いに来るよ。」此れまた大変だ。

ひとまず報告と消えようとした次の瞬間・・。

「よオ。誰かと思えばメグナじゃねえか。」と低い男の声がした。

メグナはそれを聞いて驚き後ろを見ると其処には土方がいた。

メグナは冷や汗かきつつから笑いをして「あらゝ。これまたどうも誰かと思えば土方の旦那さんじゃないの。」と言った。

土方は楽しそうにメグナを見て「久しいじゃねえか。元気そうで安心したぜ?」と言った。

慶次「第23夜。特殊ダムピール界の風来坊前田慶次ワカバのビルの路地裏で現れてそして・・。」

「次章もどうぞ宜しくね。」

以上です。 此処までご覧頂いて有難うございました。



第23夜。特殊ダムピール界の風来坊前田慶次ワカバのビルの路地裏で現れてそ

今章もご覧頂きありがとうございます。

今章では主に前田さんが出てきます。（尚此方では特殊ダムピール  
と言う設定なので予めご了承下さい。）

ほぼ毎回ですが残酷シーン等ありの長丁場の予定です。

コラボ要素が含まれます。苦手な方はお引き取りされた方が宜しい  
かと思います。

松永さんも出ます。

尚後半から幼い夏美が出ますので会話はひらがなになると思います。  
その辺も了承して下さい。（今とそして子供のころをあえて分かり  
やすくするために。）

其れではどうぞお楽しみくださいませ。

第23夜。特殊ダムピール界の風来坊前田慶次ワカバのビルの路地裏で現れてそ

アレから、‘散歩を楽しんでいた慶次はワカバのビルの路地裏に密かにもぐりこんでいた。’

そうしたら何と、‘過去との再会を偶然にも果たしてしまう。’其れも望まない再会を。

ああ・・会ってしまった。俺の、いや・・俺達の亀裂を生んでそして、

俺の心の中にある深き闇をつくってしまった人に。’

すると久秀は慶次を見てフツと笑い「卿にしては珍しい。抵抗しないのかね？」と聞いた。

慶次はそれを聞いて久秀をまるで睨みつけるかの様に「抵抗してもどうせ逃がしてくれねえんだろ？」と聞きなおした。

久秀はそれを聞いてククと楽しそうに笑い「良く分かってるじゃないか。

そうだよ。逃がさないよ。卿はあの日、あの時私と出会ってからすでに私から逃げられない運命のだよ。’諦めたまえ。少年。’

そう言いながらいつの間にか後ろに素早く周り慶次の首に手刀を入れ気を失わされた。

そして慶次の体を抱えて再度ククと笑い「新しい闇の世界にようこそ。少年。」と楽しそうに呟き

つつ「私がまた卿の中にある、私が入れてあげた深き闇を育ててあげようじゃないか。」

いやはや・・・楽しみは尽きないものだ。

そう再度呟きつつも歩みながら闇の中に消えて行った。

一方、その様子を遠目で見ていた夏美のクノーメグナがいた。

メグナは冷や汗かきつつも「ありや・・・間違いない松永の旦那さんじゃないのさ。」

ヤバいぞ。もし、私しやア様の勘とライカの姉さんの勘が正しければ間違いないく近いうちに姉さん達に会いに来るよ。」

此れまた大変だ。ひとまず報告と消えようとした次の瞬間・・・

「よオ。誰かと思えばメグナじゃねえか。」と低い男の声がした。

メグナはそれを聞いて驚き後ろを見ると其処には土方がいた。

メグナは冷や汗かきつつから笑いをして「あらゝ。これまたどうも誰かと思えば土方の旦那さんじゃないの。」と言った。

土方は楽しそうにメグナを見て「久しいじゃねえか。元気そうで安心したぜ？」と言った。

メグナは手に顔をやりながら心の中で・・・松永の旦那さんの情報は少なからず入っていたけど、

土方の旦那さんに関しては入って来ていなかったな。ああ、一応クノ一なのに私じゃア様何してるんだろうね。と苦笑いしながら呟いていた。

すると、一風が舞った。其処に黒ずくめのスーツを着たオレンジ色の髪の男がいた。

メグナはそれを見て慌ててクナイを取り出し「あ、貴方は確か風魔の旦那さん！！！」

土方もそれを見て驚いた。

・・・！オイオイ、風魔だと！？冗談だろ??

すると風魔は行き成りメグナに対して斬りかかった。

メグナもクナイで応戦する。

と同時に風魔は風を起こし応戦した。

メグナはそれを受けて壁に激突してしまった。

メグナは軽く舌打ちして前を見て「・・・私しやア様とした事が様無  
いね汗」

と同時にさらに風魔はメグナに突進して斬りかかってきた次の瞬間

ガキイインとメグナをかばうように夏美が出てきた。

メグナはそれを見て「・・・！夏美の姉さん！！！」

夏美はタバコに火を灯してフツと笑い「よう。メグナご苦労さん。」  
とさらに続けて

「お前さんはひとまず戻ってな。」

メグナ其れを聞いて不安そうな顔しながらも頷きその場をすばやく  
後にした。

夏美はそれを確認して再度風魔を見てフツと笑いながら「悪いね。

風魔の兄さん、チイと今度は私しやアの相手頼むよ。」

風魔はそれを聞いた途端素早く分身を作り夏美を囲んだ。

夏美はそれを見てタバコを加え直して苦笑いして「あゝあ、分身かい。しゃあねえな。ま・・やるしかねえか。」そう言い翡翠刀を鞘に納めて片手で印を結びヒュウッと息を吹きかけた。

すると夏美自身も分身になった。

「・・火炎風拳火炎風分身術。」と同時に「火炎龍弾派！！！」と風魔に向けて攻撃した。

火炎が龍の形をしてそして弾のごとく舞いそして風魔は壁に激突してそのまま消えた。

夏美はそれを確認すると素早く分身を解いてその場を後にしようとした。

すると土方に声かけられた。

夏美は其れを聞いて苦笑いして足を止めるが・・チラッと見て「またね。兄貴。」そう言い今度こそその場を去った。

土方はそれを見てニヤリと笑い「俺等から逃げ切れるとでも思うのか？夏美。」そう呟きその場を後にした。

一方、その場から離れてワカバのアジトに戻ろうとした次の瞬間。

ヒュッ・・・と火薬がまかれる音がした。

と同時に指を鳴らす音がして、夏美の周りを炎が包み込んだ。

夏美は驚いて慌ててタバコを消した。

夏美は此れに見覚えがあった。

幼少の末端の頃の記憶。

ある日の夜、ワカバを追っていた。広州の子組織のアジトが燃えていて周りが炎に包まれていた。

当時の夏美。

「此れ、どうなってるの??」

どうして、もえているの??

すると後ろから・・・やあ。夏美じゃないか。どうしたのかね?ー

夏美はその声を聞いてー久秀様、ワカバの命令で私、こうしゅうの  
こそしきのようすをみにきたんです

そうしたら、もえていました。ーと不安そうに言う。

久秀は夏美の隣に来て頭を撫でてー卿のせいでは無いよ?だから  
そんなに深く考える必要もない。

敵なのだろう?敵の事まで想う必要などないのだよ?ー

その事を聞いた幼き頃の夏美。ーでも、せつかくいただいたあ  
にさま(オウガ)のおしごとをはたせなかったです。ー

久秀はそれを聞いて心の中で・・・。

なるほど・・・卿は純粹なんだね。両親と同じ道をあえて進むか・  
いやはや、結構結構。

だがね・・・夏美。私から見れば申し訳ないがワカバのやる事は、偽  
善、にしか見えないのだよ。



だから・卿には教えてやるとしよう。その願いと想いがどれだけ  
‘虚しいのかを’。そして、ワカバより広州とやらの方がいかに  
欲望に対して純粋な事だと教えておいてあげよう。’

後・私の手元にじっくり、今の心を壊しそして此方に墮としてあ  
げよう。’

夏美はふと心配そうに・・久秀様？どうしたんです？・

久秀はフツと笑い夏美の頭を再度なでてーいやはや、何でもないよ。  
卿が気にする事もない。ー

さてはて、もう一度上げるとしようか・・綺麗な花火をね。’

其処で夏美の回想終了。

「・・・火薬か。あの方しかいねえな。」と軽く舌打ちした。

すると炎の輪の中に1人の男が入って来た。と同時に夏美を見て

「やあ。ごきげんよう。久しいね夏美。」と眼の前に久秀が立っ  
ていた。

夏美は両目を見開き驚きながら「・・・久秀様。」と呟いた。

いや・・・参ったね。

すると、久秀は夏美の内心をまるで見透かしたかのように・・・火の中に入り夏美の前にいつの間にか立っていた。

そして驚く夏美をよそに頬を撫でて「・・・私から逃げ切れるとも思っているのかね？」

と楽しそうに言った。

ああ・・・ヤバい事になったな汗。‘会ってはいけない人にまた会ってしまった。’

どうして・・・そつとおいてくれないの？何で、ワカバの宿命<sup>サダメ</sup>のまま生かせてくれないの？

ああ・・・面倒事<sup>メンデー</sup>になったな。冷静でいようと思つのにどつやらの人の前ではその冷静さ

も無意味だ。

夏美は軽く舌打ちして覚悟を承知の上で炎の輪に突入して其処の輪から脱出した。

と同時に咳き込んだ。

参ったね。そろそろワカバに戻らないとね。と呟いた次の瞬間後ろから首に痛みが入った。

そして夏美の意識はゆっくりと内心しまったと呟きながら落ちて行った。

久秀はフツと笑い「油断大敵」だったね。夏美「そう呟きながら気を失った夏美の体を抱き起こしながら「さて、あの少年と共に久々な再会を祝おうじゃないか。」と言いながら歩き出して再度闇に消えて行った。

其れと同時に1つの紫色の月のペンダントが落ちていた。

夏美の様子が気になったライカが慌てて夏美がいた所に走って着いた。そして其れを見て広い軽く舌打ちして「・・・どうやら、久秀の旦那さんにかっさられたらしいな。」

無事でいてくれよ？相棒。そして、ライカはひとまずワカバに戻った。

第23夜。特殊ダムピール界の風来坊前田慶次ワカバのビルの路地裏で現れてそして・・・完。

第23夜。特殊ダムビル界の風来坊前田慶次ワカバのビルの路地裏で現れてそ

ご観覧頂きありがとうございます。

遅くなりましががほぼ毎回の予告風をどうぞ。

此処は、某所にある黒ビルの3階。

其処は久秀の隠れ家でもあった。

慶次そして、夏美はアレから久秀に攫われて此処で寝かされている。

因みに、3階には右と左に部屋が分かれている。

右が慶次、そして、左が夏美だ。

目が先に覚めたのは慶次だった。

辺り見渡して、窓を見ると、外はすっかり暗くなり紅い月が出ていた。

すると、慶次の額から知らずに汗がかいていた。

特殊ダムピールは、紅の月になると異様に、喉の渴きに、襲われるのだ。

そして、血が欲しくなる。

慶次は、慌ててベットに座りこみ血液錠剤タブレットを取り出し飲み始めた。

すると、背後から「御目覚めかね？少年？」と久秀の声がした。

と同時に振り向く否や何時の間にか久秀にベットの上で押し倒されていた。

慶次は、最初は抵抗するが無駄に終わった。

其れをよそに、久秀は自分の左手親指を咬んで血を流す。

其れを見た慶次はまるで、もの欲しそうな顔をしていた。

久秀はそれを見てフツと笑い「・・・卿の望むままに欲しがればいい」。

と言いながら慶次の口に持っていく。

最初は躊躇していた慶次も、血の匂いに抗えずに久秀の左手親指を口に含んで飲み始めた。

その様子を見た久秀は満足そうに慶次の頭を撫でて「欲望のまま  
赴くと良い。それが本来の姿なのだよ？人間もそして吸血鬼、ダム  
ピール」（我々）もね。」と言い聞かせた。

一方、此处は左側の夏美の部屋。

夏美は、夢の中にいた。

そして、久秀とは別のあの男の声が聞こえる。

「お前は、怜と同じく私のものだ。私から逃げ切れと思うなよ  
？」

橘本家の小娘。

と同時に目が覚めてベットから飛び起きた。

そして、頭を抱えて「・・・夢か。」

と同時に「・・・ディーンさん。」

貴方は私の何を知っているんです？と心の中で呟いた。

慶次「第24夜。吸血鬼界の梟雄、松永久秀の隠れ家で目が覚める  
慶次と夏美。そして夏美が見た夢・・・。」

「次章もどうぞよろしく頼むよ。」

以上です。

有難うございました。



第24夜。吸血鬼界の梟雄、松永久秀の隠れ家で目が覚める慶次と夏美。そして

有難うございます。

今章は前章の続きみたいなものです。

長丁場の残酷シーン（残酷言葉）等あり予定ですので再度予めご了承ください。

第24夜。吸血鬼界の梟雄、松永久秀の隠れ家で目が覚める慶次と夏美。そして

此処は、某所にある黒ビルの3階。

其処は久秀の隠れ家でもあった。

慶次そして、夏美はアレから久秀に攫われて此処で寝かされている。

因みに、3階には右と左に部屋が分かれている。

右が慶次、そして、左が夏美だ。

目が先に覚めたのは慶次だった。

辺り見渡して、窓を見ると、外はすっかり暗くなり紅い月が出ていた。

すると、慶次の額から知らずに汗がかいていた。

特殊ダムピールは、紅の月になると異様に、喉の渇きに、襲われるのだ。

そして、血が欲しくなる。

慶次は、慌ててベットに座りこみ血液錠剤を取り出し飲み始めた。

すると、背後から「御目覚めかね？少年？」と久秀の声がした。

と同時に振り向く否や何時の間にか久秀にベットの上で押し倒されていた。

慶次は、最初は抵抗するが無駄に終わった。

其れをよそに、久秀は自分の左手親指を咬んで血を流す。

其れを見た慶次はまるで、もの欲しそうな顔をしていた。

久秀はそれを見てフツと笑い「・・・卿の望むままに欲しがればいい。」

と言いながら慶次の口に持っていく。

最初は躊躇していた慶次も、血の匂いに抗えずに久秀の左手親指を口に含んで飲み始めた。

その様子を見た久秀は満足そうに慶次の頭を撫でて「欲望のまま赴くと良い。それが本来の姿なのだよ？人間もそして吸血鬼、ダムピール（我々）もね。」と言い聞かせた。

一方、此処は左側の夏美の部屋。

夏美は、夢の中にいた。

そして、久秀とは別のあの男の声が聞こえる。

「お前は、怜と同じく私のものだ。私から逃げ切れと思うなよ？」

橘本家の小娘。

と同時に目が覚めてベットから飛び起きた。

そして、頭を抱えて「……夢か。」

と同時に「……ディーンさん。」

貴方は私の何を知っているんです？と心の中で呟いた。

そして、夏美は懐からタバコを取り出し火を灯し始めてタバコを吸い始めた。

「卿も御目覚めの様だね。」と後ろから声がした。

夏美は、その声を聞き慌てて携帯灰皿にタバコをもみ消した。

そして「・・・久秀様。」と久秀に向かって言った。

久秀は夏美に近づきながら「やあ。夏美。」と頬笑みながら言った。

夏美は、久秀に一礼してベットから立ち上がり窓に向かって歩き出した。

其れも無言のまま・・・。

そして、窓を見た。其処には、珍しい組み合わせが、今までは紅の月だけだったのが、普通の満月も

出ていたのだ。

すると夏美は其れを見て「・・・満月か。」何時の間に出てきたんだ？

そして、左ポケットから1つの赤い龍の小さなペンダントを取り出し開けた。

其処には、嘗ての姉妹分同士だった若き日のメイランと夏美の写真が入っていた。

「・・・光よ、光よ、光の国。光のコミュニティ・・・護りたまえや。」

と同時に窓を見ながらそのペンダントを顔の前に出し握り締めていつの間にか知らぬ間に涙を流しながら

「女々な。」と同時に「とんだ茶番だ。」

・・・なあ、メイラン何で私しやアは、アンタが私しやアと同時に捨てたあそこを今でも護ろうとしているんだ？

ヨウコウ  
陽光

其れと同時にメイランに撃たれた過去の銃弾の古傷が痛んだ。

すると、いつの間にか久秀が夏美の後ろにいて抱きしめていた。

夏美は一瞬驚いたが、いつの間にかなすが成されるままになっていた。

そして、いつの間にか久秀の手が夏美の眼の所まで来ていつの間にか夏美の涙を指先で拭っていた。

夏美は、只黙りつつづけていた。

久秀は、いつの間にか夏美のタバコをもみ消して吸いながらをゴミ箱に捨てて夏美を抱き寄せた。

と同時に、夏美は赤い月のペンダントを左ポケットの所にしまい、もう一つ持っていた紫の月のペンダントを探したが・・何処にも見当たらなかった。

内心舌打ちして・・多分何処かに落としたのかもしれないな。と呟いた。

やれやれ・・参ったね。あら、私にとっちゃあ大事なもんだからな。、

すると、行き成り、痛みが夏美を襲った。、

夏美は驚きつつ、痛み所に目線をやる、するといつの間にか、久秀に咬まれて血を吸われていたのだ。

痛みと同時に押し寄せる快樂、

・クソ。私しゃアとした事がざまあないね。

申し訳ありません。兄様！すまねえ・・・相棒達。どうやら、私し  
やアは此処までの様だ。’

ごめんな？有理。

姉さんは、もうそろそろ多分、此処までだ。’

と同時に夏美自身の意識が失った。

久秀は、其れを感じたのか夏美の首筋から牙を抜き取りながら、  
倒れかかるうとする夏美の体を支えて

フツと笑い「・・・どうやら、その様子だと少し頂きすぎたかな？」  
と笑って言った。

そして、再度ベットに寝かせて夏美の頭を優しく撫で「・・・さて、  
’卿には何を与えてあげてそして何をもらおうか。’」と楽しそう  
に呟いていた。

すると夏美は、いつの間にか意識を取り戻しつつも途切れ途切れつ  
つも「・・・た、頼むから。も、もう・・・此れ以上奪わないで。’」



此れ以上奪われたくない！そう叫びながらも自身の首筋に左手をやり血を補給させてベットからフラフラとしながらもその部屋を後にしようとするが、また久秀によって止められた。

そして夏美は、いつの間にか悲しそうな目をして笑い「・・・どうせ、久秀様も私から大切なもの奪うつもりなんでしょ？」と言った。

久秀はそれを見て、只黙ってしまっていた。

其れを見て夏美は、久秀の所をすり抜けるかのように、久秀はそれを再度止めようとしたが・・・。

「いつの間にか夏美は消えて行った。

久秀は、その光景を見て「・・・」驚いたよ。夏美。まさか、卿のその様な瞳を見る事になろうとはね。」

「・・・私は、卿から何も奪うつもりはないのだよ？」「只、あの少年と同じ様に卿には側にいて欲しいのだよ。」

と、「普段誰も見た事のない様な悲しき表情で見てそして呟いていた。」

一方、夏美はワカバ方面の路地裏にいた。

そして、いつの間にか壁に身を預けていた。

何時もの様に、タバコに火を灯す。と同時に小さな手鏡を取り出した。久秀に咬まれた首筋の後を見た。

そして、知らぬ間に触った。

タバコの煙を吸いながら無言のまま手鏡をとりあえずしまつ。

そして、蝙蝠の鳴く声が知らぬ間に聞こえて上を見る。

空は、どす黒かった。何時もの様なすんだ夜の色ではなかった。

夏美はそれを見て「・・・アレは、まさか『黒渦<sup>くろまが</sup>』？」

すると、幼少のころの記憶を再度駆け巡った。

ある日の夜久秀とあつた時の会話。

幼少の頃の夏美『久秀様。あれはなんですか？』

久秀は、幼少の頃の夏美に近づき『ん？何がだね？』

幼少の頃の夏美は空を見ながら『まんげつのところに、‘おおきなくろいうず’がまわりをかこんでいます。』

久秀は其れを聞いて空を見た。するとフツと軽く笑い『・・・卿はまだ幼すぎる故この話しは酷かもしれんが、いずれ、成長になるにつれて分かるかもしれないからね。’教えてあげよう。』

と同時に、幼少の頃の夏美をもっと見やすい様に肩車をして『あれは、‘黒渦’<sup>くろまが</sup>’と言うのだよ。』と同時に『・・・あれが出た時は、人がどこかで死ぬのだよ。’』

その事を聞いた幼少の頃の夏美は不安そうな顔して其れを見ていた。

久秀はそれを見て幼少の頃の夏美を自身の腕の中に抱き寄せてながら頭を撫でて『・・・心配せずとも良い。死ぬのは卿ではないのだからね。』

幼少の頃の夏美はただそれを黙って聞いていた。

回想終了。

夏美は思い出したかのように軽く舌打ちして「・・・そうか！アレは黒渦だ。今思い出したぜ！！クソ！！頼む相棒たち無事でいてくれよ！！！！！」

すると男の声の叫び声がした。夏美は思わずそちらの方面に走って行った。

すると1人の男が血だらけになって倒れていた。

夏美は急いで確認すると「・・・！こいつは特殊討伐教会の下っ端！！？何で！？」

となると、特殊討伐教会の連中がこの近辺にいるって事か？

と同時に戦う音がする。

夏美は急いでその場に走って行った。

此処は、ワカバの一応管轄内でもあるからな。好き放題にやらせてたまるかってんだ。

「こ、こいつは化けもんだ……！」と慌てて男の声がした。

と逃げる音がする。

「この私から逃げられるとも思ってるのか？」とまた男の聲がする。

その声は夏美にとって、聞き覚えのある声だった。

オイオイ……本気かよ？あの男（ヒト、デインさんか？）

とりあえず、引き上げた方が良くもな。

すると、行き成り蝙蝠の大群が夏美に襲ってきた。

夏美は慌てて「クソ……蝙蝠か……！」急いで印を結び「火炎風拳！火炎風烈風弾……！」と技を出し

蝙蝠の隊群を焼き払った。

其れと同時に血の匂いがした。

夏美は軽く舌打ちしてタバコに火を灯し「・・・血の匂い」か。どうも、未だに慣れんな。血の匂いは・・・あの頃の私の思い出す。」そして続け様に「・・・隼人。」と小声で呟いた。

嘗ての想い人そして、嘗ての婚約者の名を。

そして空を見て夏美は苦笑いして「・・・ねえ。隼人。未だに、過去に蹴りを中々つけない私を貴方は

どうみているのかしらね？」と悲しそうに呟いた。

すると、いつの間にか前にディーンが現れていた。

夏美はそれを見て驚いていた。

クソ……。何時の間に！？汗。不味いぞ・・・不味いぞ。

すると、その様子を見ていたディーンがゆっくりとだが夏美の所に向かって歩き出した。

夏美は引きさがる。そして後ろには何といつの間にか久秀がいた。

ワオー！！前に、ディーンさん、後ろに久秀様。私しやア様ひよつとして絶体絶命？ツて奴？いやはや

参ったね。と心の中でどついていた瞬間……。金色の長髪をして、全身赤紫のチャイナドレスを来て

いた女が夏美の前にふと現れた。

夏美はそれを見て両目で見開いて驚き「・・・まさか。」

アイリン  
愛凜？

愛凜。特殊純血の女吸血鬼。彼女も幼少の頃の夏美を知っている。

と同時に夏美自身も探していた。

愛凜が通っていた所を慌てて追いかけて「待つて・・・！待つて・・・！愛凜！」と叫び続けながら歩い皇とした次の瞬間携帯に電話がかかって来てライカから広州からのワカバへの襲撃の一報が入る。

夏美はそれを聞いて軽く舌打ちして慌てて分身術をつくりその場を回避した。

ディーンはそれを見てフツと笑いながら「・・・逃げたか。」まあ・・・いいさ。今度会った時には必ず手に入れてやる。

すると、爆発音になった。久秀もディーンもその爆発音に眼をやった。

其処には傷だらけの夏美がいた。

「ちいくしょう！よりによってお前さん達か！！」とタバコに火を灯しながら言った。

すると討伐教会の幹部達が夏美の前に現れていた。

・・ちいくしょう。すっかりアレだな相棒ライカの言い分通りになっちまったな。

さて・・・どうするか。

すると、討伐教会の幹部の1人が夏美を見て「橘夏美。貴様に聞きたい事がある。愛凜という女は何処にいる？」



夏美はそれを聞いて眉しかめて「……それを聞いてどうするつもりだ？」

幹部はそれを聞いて「……我々討伐教会に引き入れる。あの女は、力がすごいからな」

夏美はタバコを吸いながら「……そして、特殊を<sup>ダムピール</sup>ほぼ一人残らず壊滅するってか？」

幹部はそれを聞いてニヤリと笑い「……流石だな。察しが良い。流石は‘炎龍’と呼ばれた事があるな。」

夏美其れを聞いて再度フンと笑いながら「……んなの。とうの昔に捨てた名だ。」と同時に「すまんが、私にもあの人の‘居場所’分からのよ。」

幹部はそれを聞いてフンと笑いがえして「そうか、なら……貴様にはもう用は無い。」指鳴らし

討伐教会の幹部連中を出した。

「そいつを始末しろ。後が厄介だ。」と命令した。

すると、そいつらは一斉に夏美に向かって攻撃仕掛けた。

夏美はそれを見て軽く舌打ちして火炎風拳で応対した。

その様子を久秀達を始め愛凜が見ているのにも気づかずに。

第24夜。吸血鬼界の梟雄、松永久秀の隠れ家で目が覚める慶次と夏美。そして夏美が見た夢……。完

第24夜。吸血鬼界の梟雄、松永久秀の隠れ家で目が覚める慶次と夏美。そして

ご観覧頂き感謝致します。

無事に更新完了致しました。ありがとうございます。

其れでは、予告風をどうぞ・・・。

アレから、久秀達と再会した夏美は討伐教会の一部幹部達の襲撃を受ける。

その目的は何と愛凜の探りの事だった。

夏美自身も探していた故、知らなかった。

だが、その事を言うともまるで‘興味’を失った様に一斉に攻撃を夏美自身にしかけた。だが・・・夏美自身も負けずに火炎風拳で応対する。

しかし・・・先程の爆発に巻き込まれたせいか傷が疼き思う様にいかない。

それでも、立ち直りながら攻撃仕掛けた。

その様子を見て幹部のある一人が「ええい！このくたばりぞこないめ！’良い加減くたばれ！！’」そう言い夏美に向けて刃を振り下ろした次の瞬間。

ガキイイイイイイン！！と音がした。

その前には何と茜がいた。

夏美はそれを見て「あ、茜！？どうしてここに！？」

茜は夏美を見て「夏美様。ご無事で何よりです。このような状態でご挨拶する事をお許し願いたく思います。実は、ライカ様からご命令を受けて参ったのです。」と頬笑みながら言った。

と同時に「ご命令を！夏美様！！！」

夏美はそれを聞いてニヤリと笑い「・・・壊滅を許可する。行け。  
、」

茜は頷き「御意！！！」そして少し引き刀を再度鞘に戻して神経を高ぶらせて「・・・夏美様方の御許可のもと。アンタ達を壊滅する。夏美様に刃を向けた事を後悔するが良い！！！」そう言い一斉に再度刀から鞘を抜き討伐教会の幹部連中に向かって斬りかかった。

夏美はそれを見て、タバコを再度取り出しながら火を灯し「・・・流石茜だ。仕事早いな。、」と呟いた。

すると「相棒オオオオ！！何処だ！？何処にいる！？」とライカの声がした。

茜「第25夜。夏美と茜VS討伐教会（一部）幹部。そして・・・。

」

「次章も夏美様！読む御許可を私にイイイイ！！」

以上です有難うございました。

第25夜。夏美と茜VS討伐教会（一部）幹部。そして・・・。（前書き）

ご観覧頂きありがとうございます。

今章は前章の続きみたいなものです。

残酷シーン等あり予定ですので予めご了承ください。

（もちろん編集可能性もあり）

第25夜。夏美と茜VS討伐教会（一部）幹部。そして・・・。

アレから、久秀達と再会した夏美は討伐教会の一部幹部達の襲撃を受ける。

その目的は何と愛凜の探りの事だった。

夏美自身も探していた故、知らなかった。

だが、その事を言うともまるで‘興味’を失った様に一斉に攻撃を夏美自身にしかけた。だが・・・夏美自身も負けずに火炎風拳で応対する。

しかし・・・先程の爆発に巻き込まれたせいか傷が疼き思っ様にかかない。

それでも、立ち直りながら攻撃仕掛けた。

その様子を見て幹部のある一人が「ええい！この‘くたばりぞこないめ！’良い加減くたばれ！！！」そう言い夏美に向けて刃を振り下ろした次の瞬間。

ガキイイイイイイイン！！！！と音がした。

その前には何と茜がいた。

夏美はそれを見て「あ、茜！？どうしてここに！？」

茜は夏美を見て「夏美様。ご無事で何よりです。このような状態でご挨拶する事をお許し願いたく思います。実は、ライカ様からご命令を受けて参ったのです。」と頬笑みながら言った。

と同時に「ご命令を！夏美様！！！」

夏美はそれを聞いてニヤリと笑い「・・・壊滅を許可する。行け。

」

茜は頷き「御意！！！」そして少し引き刀を再度鞘に戻して神経を高ぶらせて「・・・夏美様方の御許可のもと。アンタ達を壊滅する。夏美様に刃を向けた事を後悔するが良い！！！」そう言い一斉に再度刀から鞘を抜き討伐教会の幹部連中に向かって斬りかかった。

夏美はそれを見て、タバコを再度取り出しながら火を灯し「・・・流石茜だ。仕事早いな。」と呟いた。

すると「相棒オオオオ！！何処だ！？何処にいる！？」とライカの声がした。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8922l/>

---

（銀魂。）隻眼の吸血鬼とある地味な少年との出会いのその後。

2012年1月8日22時51分発行